

---

**バカップル探偵 ~真面目とクーデレと一次元萌えと~ バカップルに昇華するまで**

QUOD

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカップル探偵 〜真面目とクーデレと一次元萌えと〜 バカップルに昇華するまで

### 【Nコード】

N2428K

### 【作者名】

QUOD

### 【あらすじ】

バカップル探偵シリーズにて、僕と彼女がバカップルになるまでの過程を描く長編小説、の予定。探偵なのにミステリーがない、バカップルなのにジャンルがコメディ。そんな小説です。

やはり少しミステリーが入るかも（まだ未定）？

## 1・愉快的仲間達(前書き)

さて、とうとう書いてしまった。穴があったら入りたい。とにかくノリで書いていきます。まず、言っておきたいのがこの小説はあくまでコメディであることです。

なので三角関係、その他もろもろはまず出ません。ほんの少し行事があつて、特に山場もなく二人はくっつきますので、「俺はドロドロの恋愛が読みたいのじゃー!」という方はご遠慮ください

## 1・愉快的仲間達

「好きだ！付き合ってほしい」

突然なんだと思われた方のために言っておきますが、これは僕の台詞ではありません。では誰のものなのか？それは僕の下僕、ゲフンゲフン、親友である榊かなて奏のものなのです。

しかし、問題はそこではありません。彼が普通に女の子に告白しているとしたら、まあ、振られるにしろ、振られるにしろ、振られるにしろ、特に問題はありません。しかし

「いくらなんでも、教室の壁に向かって言わなくても」

「何を言っている！壁ではない！ここにおられる放物線さまに告白しているんだ！」

どうでもいいです。本当に。読者が混乱しているのが目に見えます。そこで心優しい（ここ重要）この僕が、皆様に分かりやすく伝えてあげましょう。なんて偉いのでしょうか、僕は。

奏は僕の幼馴染であり、腐れ縁とも言える関係です。そして彼は非常に堀の深い顔をしており、体の肉つきも程よく、スポーツも万能なのです。勿論女子にモテまくりです。……………

「いてえ！何で殴るんだよ」

「全国の男子生徒の代わりに怒りの鉄槌をくだしたまでです」

しかし、彼には困った性癖があるのです。それは幼い時より、一次元にしか恋愛感情を抱けないという、他人に言っても信じてもらえないような性癖です！少なくとも僕には理解できませんね。僕は健全な男子なのですから、普通に女の子が好きなのですよ。ランド

セルを背負ってる姿なんてサイコ……そんな目で僕を見ないでください！あ、ちなみに僕たちは中学三年生です。ついでに言うと僕は河合晃と申します。

「あ、放物線！何処へ行くの！俺を見捨てないでくれ！」

「何言ってるのですか？放物線ならまだここにあるじゃないですか」

壁が動いたら怪奇現象ですよ。僕ならちびりますね。

「心が……離れてしまった」

「接着剤要りますか？」

瞬間接着剤アルキメデス。これであなたと放物線をくっつければ、あなたは満足しますし、世界のゴミを一か所にとどめておけて、地球にも優しいですね。エコはまず、自分ができる事から。

「そんなことしても、心が離れ離れになつては意味がない！

つて止めれ！なに接着剤つけてんだよ！しかも、それ壁じゃなくて天井！ま、待て！話せばわかる！アーツ！」

奏を始末した後、僕は教室から廊下に出ました。今は放課後。人もまばらになつてきてます。僕は自分の教室を今一度見ました。何処にもある普通の教室。それが、これから約一年間僕がお世話になる三年八組。でも、始業式初日にあんな事があつたからこの先も何かと不安です。詳しくは「バカップル探偵 僕と彼女の出会い」をご覧ください。宣伝している訳ではありません、本当に。付け加えるなら今は四月半ばです。

「ぶっ………」

いささか疲れしました。流石に授業中ずっと寝てると肩が凝ります。僕は肩をコキコキ鳴らしたのち、教室を出てすぐの正面にある窓を覗きました。そこからは、あるガラス張りの建物が見えます。それは園芸部の活動場所であり、皆さんが”植物園”と呼んでいる場所です。ガラス張りの二階ほどの大きさの建物で、中には園芸部が懇切丁寧に育てた数多の植物が植えてあります。

僕は、時々ここから植物園を眺め、日々の疲れを癒しているのです。ところで誤解をまぬかれると困りますから、先に言っておきますが、僕は植物を見て癒されているのです。決して、園芸部の女子の、時々めくれるスカートに目を奪われ、ニヤけている訳ではないのです！

「あ、白」

……少しは見ているのは認めましょう。しかし、それは男性の性というやつで脊髄反射であり、自然な行動であり、別に悪いことではないのです！誰に言い訳してるのですか、僕は？

暫く、植物が女子のスカートに引つかからないかと期待しながら、植物園を眺めていると、一人の女子と目が合いました。僕の知り合いの秋月 葵さんです。一言でいえば和風美人。腰まで届く長い黒髪に、少し切れ長ながらも他人を優しく包み込む目、小さいピンクの唇、非難しようがないプロモーション、クールで大人びた性格をしており、彼女に告白した男の人達は星の数ほどいるとか。砕けた数はそれと同数とのこと。僕は、始業式の日彼女と知り合いました。それからちよくちよく会話を楽しんでおります。周りの男子の羨望の視線が痛かったですね。色んな事を囁きまくってましたよ。「秋月さんと会話してるあいつ、誰？」「僕たちの葵さんよ！」「俺の鼻に触るなー！」とか。最後の台詞を言った人は今は行方知れずですがね。苦労しましたよ、証拠隠滅は。

目があったのに、何も言わないのは失礼というもの。僕は窓を開けて、少し大きめの声で彼女に話しかけた。ここが二階だからこそできる所業。

「こんにちは、と言ってももう夕方ですが」

「こんにちは」

彼女は丁寧にも僕に一礼をした。相変わらず全ての仕草が魅力的ですね。僕も惚れてしまいそうですよ。

「何でまだいるの？」

彼女の問いはごく自然なものです。僕は部活に入っておりませんが、なのに放課後のこんな時間まで学校に残っているのは、どうしてだろうと考えたんでしょう。ちゃんとして理由がなく、こんな時間まで残っている奴はただの変人か、それとも不下校少女かの二択だけです。

「奏が」教室の放物線に告白するから付き合え！」とか言いまして。人がいなくなるまで強制的に待たされたのです」

「どうだったの？」

「砕けました」

奏と葵も知り合いです。流石に最初に奏の性癖を知った時の彼女は、いつものクールフェイスを崩してどう反応すればいいか困ったように、目を泳がせていましたよ。その姿がこれまた可愛く、カメラがなかったのが無念ではありません。一枚相場二百円は堅いでしょうし。大儲けのチャンスが！まあ、生写真は手元に置いておきますが。

「こらー！いちやついてんじゃねー！」

不意に僕の左手から声が聞こえました。ここで言う左手とは、左の方向という意味です。決して、僕の左手が喋ったわけではありません。何処のホラーですか？コワイコワイ。

その方向を向くと、まさに僕に向かって一人の男が握りこぶしをぶつけようとしているではありませんか。少し後ろに下がってみますか。

「うわ、ウワー！」

その男は、見事に右ストレートを空振りし、勢いを止め切れずにこけました。馬鹿です。流石は犬です。

「犬言うな！」

「心を読まないでください、ニッシー！」

「ニッシーじゃねえ！俺の名前は西田智明だ！」

何を言っているのですか？犬がそんな名前のわけがないじゃないですか？

この雄、名をニッシーといい、一言でいえば噛ませ犬です。以上紹介終了。

「犬言うな！」

「それしか言えないのですか！それから、心を読むにしてもたいがいにしてください」

「犬言うな！」

「言ってますん！」

もう一つありましたよ、ニッシーは語彙力が非常に乏しいのです。

要は馬鹿です。

「それより、お前、何秋月さんといちゃついてんだよ！」

「悪いんですか？」

「否定しろよ！」

「あなたが言ってきたんじゃないですか」

「普通はそこ”いちゃついてない”って否定して、俺が”嘘つけ”ってなる展開だろ！」

確かにそうですが、正直面倒くさいし、そう言ってもどうせ納得されませんし、話が進まなくて作者も困るのです。それでもギャーギャーうるさいニツシーに、流石に僕も堪忍袋の緒が切れます。全く、巷では僕ほど堪忍袋の緒が切れにくい人はいないと噂されているのに。嘘です。

「ちょ　その接着剤はなんだ！や、やめれ、やめれ、やめれ！天井とくつつけるな！うわ、榊！どけ！」

「てめえこそ何だよ！俺は今その双曲線と戯れているっていうのに、そこに重なるな！」

ふん！彼女との会話を邪魔したバツです！たっぷり悔いなさい！

「晃」

「何ですか？秋月さん」

「あともう少しで終わるから、途中まで一緒に帰ってもいい？」

学園物に欠かせない帰宅イベントですね、分かります。

## 1・愉快的仲間達（後書き）

とにかくネタと時間ができたら、どんどん書いていきます。なので  
更新不定期

2・心臓を潰す気ですか？(前書き)

というわけで)どういうわけ？(新キャラ登場。

## 2・心臓を潰す気ですか？

少しした後、校門で待つていた僕のところ、秋月さんが走りよってきました。しかし走っている姿もお美しい。

「御免、遅くなった」

「いいですよ、僕も今来たところですから」

「嘘。少なくとも二十分は待たせた」

何故バレたし！というか先程約束したのですからバレて当たり前ですね。でも言ってみたくないじゃないですか。デートで定番の台詞ですし。

どうせ彼女が出来たことありませんよ！僕は泣きたい気持ちを抑えつつ、彼女に尋ねました。

「でも何でいきなり、一緒に帰ろうなんて言ったんですか？」

「一緒に帰りたかったから」

彼女は、口元に笑みを浮かべさざりと言った。とんでもないことを言ってくれますね。純情少年をからかうと後が怖いですよ？

「ひょっとして、迷惑だった……？」

待ってください！泣きそうな顔をしないでください！いや、本当に！

僕が、なかなか言葉を発しなかったからか彼女はなんともネガティブな考えにたどり着き酷く悲しそうです。

「いや、あ、え」

何かかしないと、とは思っているのですが、慌てたせいかうまく言葉が紡げません。国語は得意なのに実技で役に立ってません！

「迷惑、なんだ………」

彼女は更に悲しみの色を顔に表しました。誰ですか、彼女を悲しませてるのは！

あ、僕か

「いえ、迷惑なんかじゃありません！本当に！」

思わず怒鳴ってしまいましたよ。もうほとんどの生徒がいないのが幸いです。もし見られたら、恥ずかしくて死んでしまいます。その前に、秋月さんを悲しませた時点でファンによる拷問を受けて死にます。放課後で本当に良かったです。

「あら、二人とも、おアツいですね」

見られてましたよ！人生最大の汚点。

誰やねん！と後ろを勢いよく振り向くと、そこに立っていたのは、少し背の低い女性でした。

この少女、美しいというよりは可愛いというイメージがピッタリです。肩に流す程度の長さの黒髪に、パツチリと大きな目や透き通るような白い肌、と秋月さんとは違った魅力のある美人です。

「葵さんも、最近よく休み時間に出かけると思ってたら、こういう事だったんですか」

喋り方は聞いているこちらが脱力してしまうほど、覇気がなく間延

びしてます。どうやら秋月さんのお友達の様子です。僕も秋月さんの友達。友達の友達は友達。つまり、僕とこの少女は友達なのです。

今ここに、僕と少女が会話しても不自然でないことが証明されました。簡単に言うと、美少女と知り合えて僕ラッキー！

「京<sup>みやこ</sup>、どうしたの？こんな時間まで」

秋月さんが尋ねた。この台詞から彼女の名前が京と判明しました。べ、別にラッキーだなんて思っていないからね！

……………男のツンデレは虚しいと感じる今日この頃。

つまらない事はさておき（前作で何回言ったか分からない台詞です）、彼女の質問は少しわかりにくいですね。彼女の悪い癖ですが、口数が少なすぎて何を聞いているのかよく分からない時があります。この問いを分かりやすく言いかえると”何で今までも学校に居るの？”と言う意味でしょう。

「教室で、日向ぼっこをしていましたら、こんな時間になっていました」

笑顔のままそうお答えになられるこの女性。見ているだけで癒される感じの笑顔です。惚れてまうやる！

しかし、何故だか、彼女とはダーリン、ハニーの関係には如何にしても昇華できない気がします。裏の事情でしょうか？

それにしても、僕は蚊帳の外の様です。グレてやりたいところで、そんな子供みたいなこと出来る訳がないだろコンニャ、ゲフンゲフン、出来る訳がありません。

どうしたらいいかよく分からない、僕を見てか、秋月さんがフォロワーを入れてきました。

「日向京、私のクラスメイトで親友」

「あ、は、初めまして、河合晃と申します」

「日向京です、宜しく願います」

普通語尾などを延ばすと、鬱陶しい事この上ないのですが（主にヤンキー）、彼女だと可愛く思えるのは何故でしょうか？

頬がつい緩みそうになるのをグツとこらえながら、彼女を見つめてふと疑問に思いました。

「あれ、始業式の騒ぎの時に居ませんでしたよね？」

始業式の騒ぎとは第一話でも触れましたが、簡単にいえば、始業式に植物園で人が死んで彼女が疑われ僕が無実を証明し犯人を捕まえたのです。いや、捕まえたのは警部さんですけど。

しかし、その騒ぎの中で彼女を見かけませんでした。学校中の人間が事件現場に集まったというのに、しかも親友が疑われているというのに現場に来ないとは如何に？

もしかして、あなた悪女？

「インフルエンザ」

さいですか。日向さんの代わりに秋月さんが教えてくれました。

インフルエンザで始業式を休んだのですか、季節から考えて新型でしょうか。

おっと、もう一つ疑問に思っている事がありました！

「そう言えば、あの日の犯行時刻、何処に行ってたんですか？秋月さん」

そう、その事件で彼女にはアリバイがなかったのです。休み時間

中に教室から離れていたみたいで。秋月さんはまじめな性格です（僕もね）。テストの合間の休み時間が犯行時刻でしたが、彼女ほど真面目であれば、教室で次のテストの為の最後の追い込みをする筈でしょう。

僕は真面目ですよ！真面目に不真面目なのです！休みに廊下で植物園を眺めていたとしても、僕は真面目です！誰か認めてください……

くだらない事はさておき、僕は秋月さんの言葉を待ちます。まさか彼氏が？そいつの名前と電話番号を教えてください。毎夜毎夜イタ電し、ゲフンゲフン、お友達になりたいです。

「トイレ」

さいですか。

「ほお、そんなに時間がかかったのですか？」

「月経」

さいですか、ってええ！そんな事をさらりと言って大丈夫なのですか？僕の心臓を壊す気ですか！

その後、帰る方向が真逆の日向さんと泣く泣く分かれ（本当に泣いたら引かれるので心の中で）、今は秋月さんと一緒に夕焼けの帰途についています。というか

「秋月さん、家はこっちのほうにあるのですか？」

「うん、この先のウィンターヒルズ」

ほう、僕の家近くのあのマンションでしたか。って、こんな美少女が近くに住んでいるのに気付かなかった僕の馬鹿！

「河合君もこの方向？」

「イエス、キ」

キリスト！と言いかけて口を嚙む。僕はキリスト教徒ではありません、幸福実現党です。嘘です。

「ウインターヒルズの奥のしがない一軒家ですよ」

これも嘘。実際は手前にありますが、そんな事を言えば、彼女と帰れる時間が削れてしまいますよ。そんなことは認めません！

「嘘」

何故ばれたし！あれ、デジャヴ？

彼女が指差した先を僕が見ました。おう、この洋風づくりの二階建ての家はマイホームではありませんか。しかも、玄関口に”河合”というプレートがありますよ。ナンテコッタイ、いつの間にか家の前にいたじゃありませんか！

「違います」

「でも河合って」

「同性の別人ですよ」

「あ、お帰り。晃」

お母様アアアア！僕の必死の言い訳が無駄になったではありませんか！

「パパもいるぞ、息子よ」

「あなたはいいですね」

「ヒドッ！」

玄関から出てきたお父様とお母様（しかも腕を組んでいます、いい年して）のせいで、ここが僕の家だとばれてしまいました。個人情報漏れてしまいましたよ。

「慰謝料を要求する！」

「息子に慰謝料を要求する親が何処にいるのですか！」

「ここに！」

ベタなギャグは要らないです！

「今時悪口を親に言わない息子のほうが少ないですよ！」

「それに対しての慰謝料じゃない！」

「じゃあ何ですか！」

「ママとのラブラブタイムを邪魔されたからだ！」

「くだらないですね！」

むしろ、彼女との帰宅時間を邪魔されたこちらが慰謝料を請求したいですよ！

あれ、お父様と思考回路似てきました？イヤジャー！

僕とお父様が言いあいをしていると、お母様が僕の隣にいる女性に気がつきました。

「キヤアアアア！幽霊！」

何故！彼女の何処をどう見れば幽霊になるのですか！ほら彼女も、何が何だか分からないと言った顔をしていますよ。

「幽霊じゃありませんよ」

「じゃあ」

「妖怪でも、プラズマでも、宇宙人でもありませんよ」

「ダウト！」

「嘘じゃありません！」

さつきから怒鳴りっぱなしで疲れますよ、本当に。って、お父様、何蚊帳の外になっただけなのにそんな悲しそうな顔で見つめてんですか！いい年して、指をくわえないでください！

「こちら、学校の友達の秋月葵さんです」

「は、初めまして」

何やら彼女は少し緊張しているようで、彼女にしては珍しく、最初詰まりました。しかし、礼をするのを忘れていません。さすが和風美人（関係ない）

「私、晃の母親の河合岬と言います、初めまして」

「俺は、晃の父親のディープスペク、ちょ！ギブギブ！関節が〜」

外国人を親にもった覚えはありません。僕は父に関節を決めながら、代わりに彼女に答えた。

「この人は、河合健介太郎の介五郎座絵門直孝です」

「ちょまで！何かいろいろ要らないものがついてる！って、イタ〜」

いえ、あなたは河合健介太郎の介五郎座絵、座絵……………

「初めまして、河合健介太郎の介五郎座絵門直孝さん」

そうそう。

「ママ、皆がいじめる〜！」

「はい、よしよし。高い高い」

いい年して、甘えない！って、高い高い？

おっと、読者の皆様にも二人の容姿を言っておかないと。変に気持ちの悪い顔を想像されてはたまったものではありません。ちなみに僕は黒髪ショートヘアの眼鏡です。

お母様とお父様はいたって平凡です。二人とも中肉中背。バカッブルである事以外に特に特徴はありません。何でこんな平凡な家庭に、僕のような素晴らしい息子が生れたのでしょうか？自分を過大評価してスイマセン。

「これから、パパ達は映画に行くからな！ついてくるなよ」

「バカッブルのデートに付き合う人が何処にいますか？」

「ついてこいよ！」

「どっちですか！」

泣きながらお父様に袖クイクイされてもうれしくありません！

「ママー！晁が〜」

「パパ、晁はツンデレなんですよ」

違います！何時僕がデレましたか！

「そうなのか、おい、晁。それならツンが無くなった時に一緒に」

「何処にも行きません！」  
「ママー！」

もう、うざいからとっとうちかけてください！

「パパ、行きましょう」  
「うにゅー！」

お父様は渋々、ガレージに向かい車に乗り込みました。お母様もそれに続こうとして、途中で踵を返し、僕の耳元でこう囁きました。というか耳がくすぐつたい。

「家のベッドはママとパパ専用だからね。するなら自分の部屋で」  
「しません！」

親が何という事を言うのでしょうか。秋月さんに聞かれていないかひやひやです。心臓に悪いですよ。

こうして、両親は車で映画を見に向かい、家の前に僕たちが残される形になりました。僕がかすかに溜息をつく、今まで閉口していた彼女が喋りました。

「賑やかな家族」  
「家族じゃなくて両親と行ってください。その言い回しだと僕も含まれている事になります」  
「違うの？」  
「違います」

絶対同種の人間ではありません！将来は絶対にあんなバカカップルにはなりませんよ。

え、なんで皆”嘘つき”って顔して僕を見るのですか？

「ここが、河合君の家」

彼女はそう言って僕の家をじっくりと見ます。恥ずかしいからやめてください。

「自慢できるほどの家じゃありませんけどね」

「ううん、良い家」

彼女は首を振ってそう答えました。何故か気恥ずかしい気持ちになり、ふと、僕たちは帰宅の最中であつた事を思い出します。そうだ！親のせいで彼女の家までいけなかつたのでした！家に帰つてきたら靴の中に画びょうを仕込んでやります。

しかし、まだチャンスはあります。秋月さん、今から言う言葉に肯定の返事をしてくださいね？

「家まで送っていきますよ」

「別に良い」

即答しないでください！悲しくなります！どうせ僕なんか！

僕は悲しみに打ちひしがれました。しかし、そう言ったのに彼女はその場を離れず、車の去つた方向をじつと見たまま立ち止まつたままです。どうしましたか？イケメンでもいましたか？ どうせ僕なんか！

すると彼女は一度頷くと、僕の方をむきました。何ですか？彼女はクールフェイスであるからして、考えている事がよく分かりません。

「河合君」

「な、何でしょうか？」

「明日、私を拉致してほしい」

は？今なんと？

2・心臓を潰す気ですか？（後書き）

いやはや、名前を考えるのはいつも大変です。京はなかなか出ませ  
んでした。

というか、面白いのか、この回？

### 3・犯罪者にはなりたくない(前書き)

なんか少し短いかな。主人公が真面目だという設定がなくなっている今日この頃。

### 3・犯罪者にはなりたくない

ピ、ガチャ

朝日が差し込むベッドの上で、一人の美少年が目覚まし時計を止めて、上半身をおこし軽く伸びをしました。美少年「僕です、文句ありますか？

しかし、おいしいですねー、毎回どうしてもピッと鳴ってしまっ。何とか、一回もなる前に止めることはできないものでしょうか？しかし、もし出来たところで朝の目標を失い、以前のように日が沈むまで寝る事になるでしょうが。まさにニート。

僕は寝ぼけ眼で、まず片手を動かかし目覚ましの横に置いてある眼鏡をかけます。そして、視界がくつきりしたところで、時計で時刻を確認。

「午前六時ですか」

ところで、今日は土曜日で、学校はありません。なのに僕は何故こんなにも早起きをしているのでしょうか？簡単な話です、僕は毎朝早く起きないと気が済まないからです。

勿論嘘。大抵休日は目覚ましをかけずに寝て、八時に目が覚めます、午後の。では何故か？

簡潔に言います。今日は秋月さんと出かける約束をしたからです。

「すみません、よく聞き取れなかったので、もう一度言ってくれませんか？」

夕焼けをバックに、逆光で表情がよくわからない（とはいえ恐らく何時ものクールフェイス）彼女に僕は頼みます。いや、だってですよ？いきなり、拉致してほしいなんて、聞き間違い以外に何が

「明日、私を拉致してほしい」

ウワイー！間違ってたよ！でも全然嬉しくないのは何故？

「あの、自分が何を言っているのかわかりますか？」

拉致してほしい、なんて思考が良く分かりません。僕は北 鮮じやないんです！拉致して、警察に捕まりたくないのです！犯罪者になりたくないのです！履歴書を泥まみれにたくないのです！

しかし無情にも彼女はこっくりと頷きました。やめて！僕の将来が！

「あなたに遊園地とか、水族館とか、商店街とかに拉致してもらいたい」

そう言つて、彼女はにつこりとほほ笑みます（逆光で見えずらかったですが、口元が緩んだのがかすかに見えました）。その笑顔に悪意を感じますよ！

つて、あれ？彼女は今なんと言いましたか？遊園地とか、水族館、商店街？普通拉致されるとしたら、外国とかじゃないのですか？遊園地とか、水族館はまだ許容できるとして、商店街に拉致するわけがありません。そんな酔狂な事をする人がいるのなら、僕は迷うこ

となくその人を警察に突き出します。というか、まず拉致をした時点で豚箱行き決定ですよ。

それに、遊園地とか、水族館とか、商店街つてまるで、デートじゃないですか？よし。最初から考えてみましょう。まず、拉致を柔らかに言い変えてみましょう。

拉致 連れていく

成程、つまり先程の台詞を翻訳すると「明日、私を連れ出してほしい」という事になりますね。更に分かりやすく言えば「明日、一緒にどこかに行きたい」と言う事でしょうか？

デートやないか、それ！セツコ、それ拉致やない、デートや！僕の頭がオーバーヒート！

しかし……………、これはあくまで僕の推測です。ここで、僕が「デート！行く！」なんて言い、もし勘違いであったのなら「ウザイ！死ぬ」と彼女に言われてしまい、僕はショックのあまり引きこもり、首を括るしかなくなります！……………そもそも彼女がそんな言葉を吐くとは思えません。

何にせよ、確認する必要があります。

「あ、あの、それって、世間一般に言う、デ、デート、ではないのでしょうか？」

オウシット、物凄くドモってしまいましたよ！これでデブで汗かきだったただのキモオタですよ！って、世界中のそういう方々、御免なさい！奏殴っていいですから、思う存分！

「拉致」

凄く……………分かりづらい答えです。もう少し、分かりやすく、僕

は質問を言い変えました。

「えっと、明日、僕たち二人で、どこかへ出かける、でいいのですか？」

これなら分かるでしょう。うん。

「違う」

「え？」

マ、マジで？うわ、凄く恥ずかしい！変な勘違いしてた！僕の馬鹿！バカバカバカ！

「二人きりで」

訂正するところは、そこなのですか！

僕らは、何処で（適当に商店街を）何時に（午後一時から）を決めた後、別れました。最後まで彼女の表情が逆光のせいでわかりませんでしたよ。残念極まりない。

ちなみに、その後僕は筆箱を学校に忘れたのを思い出し、教室に戻りました。

「あ、おい晁！置いて行くなんて、ひどいだろが！早く天井からおろせ！」

「眼鏡、何とかしろよ！」

「これはこれは、一次元にしか萌えられない残念すぎる奏君と、」

前々回に作者が素で容姿を書き忘れたニッシーではありませんか。

二人とも、天井にくつついて何をしているのですか？」

「てめえが、くつつけたんだろ！いいから、何とかしろ！」

「そうだ、もう暗くなってきたし！」

「一人おろすごとに五千円で承諾しましょう」

「ぼったくり！」

奏、仕方なかったのですよ、明日デートですからお金が欲しかったのです。それに人助けをしているのですから、見返りを求めるのは当然の権利なのです！

「分かった！払うから何とかしろ！」

「く、屈辱だが、仕方がないか！あ、ちなみに俺の容姿はイケメンで」

ニッシーの言葉をするーしつつ、まず奏を救出しようとして動き出しました。この接着剤、少し水分を含めば簡単に取れるようになるのです。故に

「待て！そのバケツはなんだ！ヤメおせあじょあふおヴあヴあ  
あ！」

ドシン！接着剤が使い物にならなくなり、奏が万有引力の法則にしたがい落ちてきた音です。

「おい！いくら何でも手荒すぎるだろ！」

「これしか手段がないんですよ！」

「それなら最初からくつつけるな！」

五月蠅いですね！

「おい眼鏡！俺も早くしろよ！」

犬のくせに刃向かうんじゃありません！携帯があれば、写メをとって全国の女子にこの滑稽な様子を送りつけられるというのに。しかし、改めてみると、やっぱりこいつもイケメンには違いないのですよね。しかもとびっきりの。しかも、身長も僕より高いという。

……

「ちよ！なんだよ、その松明たいまつ！え、水をかけずに下ろす方法があるって？火をつければ、服が焼けるから下りる事が出来る？って、待ってって！それだと、俺人生の舞台からも下りないといけないから！待って！お願い！お願い！お願い！おねアゴアフォアフオアウエホファアフォウエホウエウオ！」

良い奴だったなあ、ニッシー……………

「死んでねー！」

「チッ」

そんな事があり、後は特筆するような出来事は起きませんでしたね。ただ、ニッシーを生き埋めにしたぐらいですし。

そして、今現在。時計は午前六時半を示しています。ところで、午後一時からだというのに、こんなに早く起きているのにもきちん

とした理由があります。それは、昨日僕が静かに今日の事を考えていた時です。

「おっしやー！美少女とデートです！どんな服にするか　　っ  
て待ち合わせ場所は何処だ！」

そう、待ち合わせ場所を決めるのを忘れていたのです。僕とした事がとんだ失敗を犯してしまいました。オウシット！しかも、電話番号やメアド（知ってても携帯ないから不可能ですが）も知らない！どうすればいいんだー！と叫び、「うるせー」と部屋に入ってきたお父様を窓の外に放り投げながら考えていると、ある妙案を思いついたのです。

そう、彼女がウィンターヒルズに住んでいるという事は分かっているのです。それならば、迎えに行く事は十分可能です。しかし、ウィンターヒルズは約十の棟から成り立っているからして、多少彼女の家を探すのに時間はかかります。そのために、今日は早く起きたのです。家の場所を一度確認してから、一時ごろに彼女の家に再び行けばいいのです。僕って天才！

探索に行くときからデートに着ていく服を装備するのともどうかと思ひ、今は制服姿で朝食についています。

「はい、あなた、アーン」

「アーン」

バカカップルも大概にしてください、マイペアレント。気分を害します。そもそも、食パンを箸でつまむのはどうかと。

「嫉妬か？」

「ええ、世の中の普通の両親を持っている全ての人に嫉妬しています」

「褒めるなよ」  
「褒めていません」

あなたがこの家の生活費を稼いでいなかったら、とっくの昔にエベレストの頂上に磔にしますよ、マイファザー！

「ところで」

お母様がふと疑問を言います。

「珍しいわね、晁が早起するなんて」  
「な、何ですか？僕だってたまには早起しますよ」  
「ひよっとして、昨日の彼女とデートとか？」  
「いいえ、拉致です」  
「やっぱりデートなんだ」

ギャグがスルーされました、泣きたいです！

「お前だけデートなんてずるい！パパも！」  
「昨日行ったでしょうが！」  
「足ーりーない、ママ成分が不足してる！」

ママ成分ってなんですか！って寝癖ぐらい直してください！アホ毛が顔をチクチクついているのです！

「ママ、俺たちも、今からデートに行こう！」

そう言って、パジャマから着替えもしないで 玄関へ向かうお父様。

「うわー！何で靴の中に画びょうが〜！」

「パパ、大丈夫？」

フッフ！ひっかかりましたね。僕は考えた事は実行する派なのですよ。しかもただの画びょうじゃありませんよ？例の接着剤がたっぷり塗ってありますから、どう頑張ってもとれません！水分を含ませる以外には！

「ふう、とれた。あ、足が血まみれだ、ウワン」

……………血も水分でした

### 3・犯罪者にはなりたくない(後書き)

今回は彼女の家にて、でその後にようやくデート編。しかし、書き方が右も左もわからない。

4・娘は大切にしてください(前書き)

短いorz

今回はコメディーなしだな、スイマセン

#### 4・娘は大切にしてください

「ここですか……………」

お父様の足の怪我を、お母様が手当てしているのを見ているのに耐えられなくなった僕は、財布だけ持ってそそくさとウィンターヒルズに向かいました。

いや、だってね？甘甘なんですよ？やる事やる事が。確かに唾液は傷口につけると治りが早くなりますが、幾らなんでも足を舐めるのはどうかと思いますよ？お母様。

あんな姿を僕は毎日見せられているのです。故に僕はバカップルと言つものがいかに愚かな物かを身をもって知っています。

何が言いたいかと言いますと、僕は何がどうあつてもバカップルにはなりません。ど、読者のみなさん？何ですか、その疑わしそうな目は！

僕は外に出た後、ウィンターヒルズのある方向にゆっくりと歩いて行きました。それにしても、今日はいいい天気で、絶好のお出かけ日和です。春のおかげか暑くも寒くも蒸しっている訳でもなく非常に心地いい環境です。

気分が良くなったので口笛を拭こうとしましたが失敗し、小学生くらいの子供に笑われた事が物凄く腹立たしいです。まあ、幾ら僕でも子供に手出しはできませんから、通りすがりの高校生くらいの方にラリアットをかましました。

「って、ニッシーだったのですか？」

「ゲッホ！お前な、いきなりラリアットはねーだろ！それから、昨日はよくも生き埋めにしてくれたな！」

「ネチネチうるさい人間は嫌われますよ？」

「埋められて、文句を言わない奴が何処に居る！」

きつといますよ。なんたって世界は広いんです。あ、そうだ！恐らくDMの方なら、泣いて喜ぶのではないのでしょうか。

「そんな奴いるか！」

「何で心を読めるのですか！」

「そんな奴いるか！」

「じゃあ、何で読めたんですか！」

「そんな奴いるか！」

駄目です！会話が成り立っていません！ネジが一本どころか三本は抜けていますよ、この人。

「そんなや　　ゲフベフドフ」

もう良いです。同じ言葉ばかり言わないでください。語彙力以前の問題です。ラリアットで気絶余裕の様です。

無駄な体力を使いながらも、ウィンターヒルズに辿りつき、取り合えずA号棟から探そうとエントランスに入り込みました。

そして、郵便受けの方を見て探そうかと振り向く前に目の前のプレートに気づき、冒頭に戻ります。

101 秋月

まさか、A号棟の一階に居るとは思っていませんでした。まあ、探す手間が省けましたかね。

「逆襲じゃ〜！」

って、ニッシー！何でこんなところに？エントランスから入って

来た彼のパンチを、僕は素早く横に避けます。そして、殴る物を失った、ニッシーの右手は勢いを止めきれませんでした。

ピンポン

そのまま、秋月さんの家のインターホンを押しました……。ど、ど、どうしよう！

っておい、ニッシー！逃げてんじゃないですよ！これどうしてくれるんですか！今度会ったら殴るだけじゃすませません！家畜の餌にしてやる！

今の時刻は午前七時半。人様の家を訪ねるにしては、あまりにも時間が早すぎて迷惑に思われてしまいます。

簡単にいえば、このままいけば僕は彼女に常識知らずのバスターレだと思われてしまうという事です！悲劇！

そうだ、このままバックレてしましましょう。ピンポンダツシユになりますが、僕の仕業だとはばれたくないのです！よし、今のうちに

”はい、どなたでしょうか？”

イヤー！一足遅かったようです！インターホンから、秋月さんとは違う女の人の声が聞こえてきました。しかも、このインターホン、よく見ればカメラ付き。つまりは、相手には自分の姿がしかとみられているのです！

これで、もう秋月さん視点の僕の評価は最低です！ニッシー！責任とれ！

ところで、このインターホンの声の女性は誰でしょう……。彼女のお母様に決まっています！お母様からの評価も最悪とかオワタ！

どうしよう、何を言おうか？うわー、良い言葉が思いつかない！

” あら、その制服。もしかして葵の友達？”

「 は、はい。そうです」

” あらあら、御免なさいね。まだあの子寝てるのよ”

いえ、休日の七時半ならまだ寝てる人の方が多いでしょう。それにしても、制服着ていて助かりました。何とか会話に持ち込めました。

” でも、もう少しで起きてくると思うから、良かったら上がって行って”

え？今何と？上がっていけと？幾ら自分の娘と同じ学校の制服を着ている人間だからと言って、知らない人を何の躊躇いもなく家中に招き入れる精神が分かりません。僕なら、即座にインターホンを切りますよ。

ってまだ、僕と彼女は出会って数十日ですよ？家の敷居に上がるには早すぎませんか？やばい、なんか心臓の鼓動が速くなってきました。

こ、ここは断らないと！

「 べ、別にいいです。また来ま 」

「 さあ上がって」

何時の間にかドアが開き、一人の若い女性がこちらに向かって手招きをしております。早い、まるでジャパニーズ忍者。

それにしても、綺麗な女の人です。黒のショートの髪型にボンキユツボンのナイススタイル。顔立ちは何となく秋月さんに似ていますね。

ちょっと待ってください。と言う事は、この人秋月さんの母親で

すか？嘘々！どこからどう見ても二十代です！

僕は、その女性をみて少し呆けた顔になっていたと思います。秋月さんの母親との初対面が呆け顔って……。

「どうしたの？入っていきなさいよ」

お母様は僕を手招きします。おっと、そうだった！断らないと！

「いえ、大変恐縮ですが、また後で来ますから」

「何だ、客か？」

また遮られましたよ。僕の台詞に何度かぶせれば気が済むのですか？

その声の主は、秋月さんのお母様の後ろから現れました。

髪型は茶髪のベリーショート、肉つきも良く健康的な身体に、多少いかついながらも、まず間違いなくイケメンの部類に入る顔立ちをしております。

この男性が彼女の家から出てきたところを見ると、彼が彼女のお父様と考えて差し支えなさそうですね。

その男は、煙草を加えており、僕を一目見ると歩み寄ってきました。な、何ですか？

その前に朝から煙草を吸うのはどうかと思いますよ？というか、煙草自体身体に悪いのですから。

って、そんなに近づかないでください。僕煙草の匂い嫌いなんです！あれ？何も臭わない？何故に？

そんな疑問を抱いていると、彼は僕の全身を舐めるように見ます。やめて！男に見られても嬉しくないのです！

「な、何ですか？　　って、その煙草火がついていませんけど

？」

「ああ、こりゃチョコだ」  
「チョコ!？」

ああ、確かCMかなんかでやってましたね。煙草型のチョコ。実際に啜えている人は初めてみましたか。

「その制服からすると、葵と同じ中学のようだが、何しに来やがった？」

「いや、あの」

そんなにかつい顔で僕を見ないで！凄くドスの利いた声ですよ。しかも言葉遣いが汚いです。こんな人から、あんな穏やかな娘が生まれるものなんですね。

ああ、そうか。きつとこの人の影響で彼女は”連れていく”と”拉致”という言葉をごっちゃにしているのか。

「おい、答えやがれ！」

ヒイ！少し物思いにふけていたら、何も答えない僕に痺れを切らしてか、今にも掴みかかってくる勢いのお父様。

やっぱり、この人のせいで、彼女が変な事を言う様になったんだな、ウン。

でも、しょうがないことなのでしょうね。自分の娘のところにも男が来たら普通警戒します。僕なら、その男を再起不能にしますね。つまり、僕も再起不能に？ヤメテ！。

「え、つと、今日は秋月さんと、遊びに行く約束をしまして

.....」  
「.....」

僕が絞り出した声を聞くと、お父様は懐を探り財布を取り出ししました。そして、幾らかの万札を僕に向けてきました。

え？これを僕に？何故に？僕は理由を考え、そして、一つ思い当たる節がありました。

手切れ金です！つまり”金払うから、もつうちの娘に近づくんじやねーコンニャロ”と言う事です。

それなら、受け取る訳には

「持つてけ、ホテル代だ！」

「行きません！」

何を言い出すんですか、この父親！遊びに行くだけで、ホテル代を出す父親が何処に居るのですか！

「何を言う！ホテル代だぞ！ホテルはホテルでも、ラブホテルだぞ！その代金がいらぬとはどういう了見だコンニャロ！」

「あなたこそ、どういう了見ですか！お母様の方からも、何か言つてやつてください」

「今日は赤飯にしないとね。それから他にいるものは」

貴方達！もう少し娘を大事にしてください！大体知らない男に、ホテル代持たせて自分の娘と遊びに行かせるなんてどういう考えですか！？と僕がまくしたてると

「娘の友達が悪い奴な訳がねーだろ！」

「そうですよ」

頭が痛くなってきました。この人達、もしかしたらうちの両親並みに馬鹿かもしれませぬ。

「それに昨日、葵の奴。すげー嬉しそうな顔してたしな」

「そうそう、あの子の鼻歌、久しぶりに聞いたわ。きっと今日遊びに行くのが凄く楽しみだったのね」

え、まじですか？そ、それはすごく光栄ですが、リ、リアクシヨンに困りますね。

「何時も朝は六時に起きるのに、こんなに遅いのもなかなか寝付けなかつたからに違いないわね」

子供ですか！楽しみすぎて、夜中眠れないって大人びている彼女からは考えられないですよ。きっと、他の理由です。

「お母さん、お父さん、何かあった？ あっ」

「あっ」

少し騒がしくしていたからか、彼女が玄関口にやってきて僕と目が合います。それと同時に彼女は母親の背中に隠れました。

もう既に起きていたようでパジャマではなく、黒を吉兆とした大人びた衣服でしたが、まだ多少寝癖が残っております。

というか、何で隠れるんですか？

「朝っぱらからお前の顔見て気分が悪い」

なんて言われたら僕は投身自殺をしますよ。勿論彼女は言わないでしょうが。

「な、何で？」

何でいるの？と言う意味でしょう。まあそうです。約束は午後一時からですからね。

「そうそう、待ち合わせ場所を決めるのを忘れていたいましたよね？」

「あ

彼女自身は今の今まで忘れていたようです。そうして、僕がここに来るに至った理由をかいつまんで話しました。

その後、どうせなら今から行こうという話になり、彼女が支度している間、僕は両親二人から質問攻めに遭いました。

「さあ、何回やったか言え！」

「何をですか！」

「×××に決まってるんだろコンニャロ！」

「伏字！そこ伏字！つかそんな事やってませんよ！」

「じゃあ、キスはしたの？」

「してません！」

「何もしてないだと！まさかてめえ！うちの娘を弄んでるんじゃないーだろーな！？」

「何でそうなるのですか！？普通、そういう事をするのを弄ぶって言うのでしょ！？」

「じゃあ、私とキスしましょ

「接続詞がおかしい！？なにが、じゃあ、ですか！しませんよ！」

「貴様！俺の女に手を出したら許さねー！」

「や、やめ！」

「キン（男のシンボルを蹴られた音）」

「~~~~~!」

ことゝばに出来ない ラーラーラ、ラーラー

お返しじゃー！僕もミドルキックを繰り出します。

「~~~~~!」

玄関前で悶絶する男二人。朝早くであったから、人がいない事が救い。いたら、僕の評判が最低ランクになってしまう。

「勿論冗談ですよ。私はあなた一筋ですから」

「そう言う冗談は言わないでください！」

#### 4・娘は大切にしてください（後書き）

次回ようやくデート。しかしかける気がしない

番外編・赤い顔を見せたくない(前書き)

彼女(秋月葵)視点の番外編。コメディ100%

多少、前回の「バカツプル探偵(中略)僕と彼女の出会い」の内容も含んでおりますが、犯人については触れていないので、そちらをまだ見ていなくても問題ないようにしました。

ってか、こういうのって需要があるのでしょうか？

## 番外編・赤い顔を見せたくない

私は秋月葵。宝院中学の新三年生。この宝院中学校は私立で、高一貫校。だから、ある程度の成績を取れば高校進学に困る事はない。

そのおかげで、三年生になっても園芸部の部活動にも一心に打ち込める………筈なのに。

「はあ」

お花に水をやっている、何故か自然とため息が出た。このころ、ずっとこんな感じである。

何事にも集中出来なくなってきたのである。前まではお花の世話を出来ていればそれで満足していたのに。

目の前で可愛く咲く花を見て、もう一度ため息を吐く。無論、今でもお花の事が好きではある。世話する事も勿論楽しい。

でも 何か物足りない。この表現が正しいかは良く分からないが、一番近い感情としては物足りないである。

実のところ自分でも良く分からないのだ。ただ、原因はよく分かっている。

彼だ。河合晃。八組の生徒で、私のいる五組とは別のクラスに居る男子生徒。私は始業式の日、殺人犯にされかけたのを彼に助けてもらった。

その時は、ただ彼の推理力に感心したのと、自分を窮地から助けてもらった感謝の念しかなかった。

その後、植物園で彼と二人きりになり、彼にお礼を述べると

「あ、ああ。いえ、貴方が犯人ではない事は直ぐ分ったんです。根拠が沢山ありましたから」

私はその根拠を聞き、改めて彼は凄いな、と思った。

「それと」

「まだあるの？」

彼はその言葉を言った後、何故かバツが悪そうに視線を右往左往させる。何か言いにくい事なのだろうか？

私が彼をじつと見つめっていると、彼は観念したように呟いた。

「悪い人でも死んだ事を素直に悲しめて、植物を大事に育てるよ  
うな人が、犯人だと僕は信じたくなくなかったんです」

思いもしない言葉に、私は心底驚いた。顔が赤くなるのを感じ、  
思わず俯いた。

少し気まずい雰囲気が出る。私の鼓動もうるさいくらいに、相  
手に聞こえるのじゃないかと言うくらいに鳴っている。

何で、鼓動が速くなるのか、何で顔が赤くなるのかは分からな  
かったが、少なくとも……嫌な気分ではなかった。

学校で殺人事件があったという事で、数日の間、学校はお休みに  
なった。その期間、私は彼に何かお礼をしようと色々思考を巡らせ  
ていた。

しかし、一向に妙案が思いつかず、ママに相談してみた。すると、  
ママはニッコリ笑って私に言った。

「お弁当を作っただげたら？」

宝院中学は勿論給食制度を取っている。しかし、今まで休みだった分を取り返すために今度の土曜日に登校する事になっており、その日は給食がない。

つまりは、お弁当が必要なのである。この提案も、お母さんがその事を知っているから出てきたものだろう。

特に他に良い案も思いつかなかったなので、私はその提案に甘えさせてもらおう事にした。

ただ、私は料理をほとんどした事がなかった。あっても、家庭科の調理実習くらいのものであった。

その日から約一週間、両親に内緒で、密かに料理を特訓をする日々が始まった。

両親に内緒にした理由は、お礼なのだから自分で最後まで作りたかったからだ。

お父さんに知られれば”包丁を持つなんてあぶねーだろゴラア！”と言って、包丁を取り上げられる。

お母さんに知られれば”あ、火危ないから、このハンバーグは私が！”って、野菜はもっと細かく切って！もう貸して！”と言って、結局全てママが作ってしまうから。

二つとも実際にあつた事。大切に思ってくれるのは嬉しいけど、親馬鹿にも限度があると思う。

お母さんにも頼れなかった私は、インターネットや近所の本屋でお弁当の作り方を捜し、家の野菜で包丁の扱い方を身に付けた。

「早苗。何で今日のおでんには大根がない？」

「買っておいださなかったんだけど、勘違いだったみたいで御免」

御免、お母さん。私のせい。でも、それを口にしたら、料理の練習をしている事がばれてしまうので私は心の中で深々と謝った。

毎日、夜遅くまで起きて頑張った。料理をしていて一番大変だった

たのは”適量”の文字だ。この文字のせいで、料理の味付けに幾度となく失敗し、何度も同じ料理を作る羽目になった。

こうして四苦八苦をして、とうとう運命の土曜日。何とか不格好ながらも、お弁当と呼べるものを作る事が出来た。

私は、自分の分も含めて二つのお弁当を学校に持っていった。そして、昼休み。

「はあ」

なんて馬鹿なんだろう、私は。馬鹿らしくて、思わずため息が出た。そうだ、私は彼のクラスを知らないではないか（今は知っているがこの時はまだ）。

その上、よくよく考えてみれば、彼もお弁当を持ってきている筈ではないか。それなのに、こんな不格好なお弁当を渡されても困るに決まっている。

二つのお弁当を抱えたまま、私の足は自然と植物園の方向に向いていた。

植物園の前に着くと、そのドアにもたれかかった。ひんやりと冷たい。植物園の出入り口には南京錠がついていて、私は今その鍵を持つていない。

中の植物を見て、少し気分を改善しようと思ったのだが、中には入れなかつたので、こうしてドアにもたれかかるだけにしておく。

このお弁当……どうしよう。

「秋月さん？何をしているのでしょうか？」

いきなりした声に驚き、振り向くとそこには河合君ともう一人、事件の時にアシスタントの様な事をやっていた男性がいた。後に知つた事だけど、この男性は榊奏と言う名前らしい。

まさか悩みの原因の張本人から話しかけられると思ってなかつた

私は、素早くお弁当を自分の背中に隠した。

「え、えと……あの」

何か、何か良い言葉はないのだろうか！？返す言葉が見つからず私がしどろもどろになっていると

「 エロすぎる」

「河合君の隣の男性が鼻血を出して倒れる。それを見て河合君は”だからあれほど、倉庫の壁の傷は見てはいけないと言ったでしょう！”と叫んでいる。」

私はその光景に少し唾然としたけど、少しして自然と笑みがこぼれた。少し緊張がほぐれたみたい。今なら自然と言葉が出る気がする。

「お昼……一緒に、食べて、いい？」

「え？あの お誘いは非常に嬉しいのですが、お恥ずかしなからお弁当を忘れてきまして」

そう言っつて、彼は事件の会った日と同じく恥ずかしそうに頬をかき。どうやら彼の癖みたいだ。

でも、彼がお弁当を忘れてきたと言った時、私は不謹慎かもしれないがとても嬉しかった。

「だ、大丈夫。むしろ、好都合」

「え？」

これで、心配事はない。

あとは、このお弁当を彼に渡すだけ。勢いにまかせて私は彼にお

弁当を渡す覚悟を決め、後ろ手に持っていたお弁当を彼の方に差し出した。

「はい」

彼はそれを驚いたような瞳で見つめた。そうだ、包みに入れているから、彼にはこれがお弁当だと分からないんだ。

「お弁当、作ってきた、から」

「え、お弁当？つて僕に？」

私はコクコク頷いた。

その後、彼は私のお弁当を美味しそうに、完食してくれた。

この件以降、私はよく休み時間に河合君に会いに行った。友達の京が、休み時間はほとんど寝ているから暇である、というのも一つの理由ではあるが、何時の間にか、休み時間になると自分の身体は彼のクラスの前に居るのだ。

授業中も、花の世話をしている今でさえ、少し集中力を切らすと彼の顔が頭に浮かんでくる。

彼は黒のショートヘアの髪型をして眼鏡をかけている。顔立ちは整っており綺麗であるが、特別格好いいという訳ではなく、どちらかと言うと中性的であり、女装が似合いそうだ。

体つきは多少痩せていて、背の高さは中学男子の平均くらい。性格は、多少ふざけている部分もあるけれど、基本的には優しい。：

……。今、何故か読者からクレームが来た気がする。

でも、何で彼の顔が頭に思い浮かぶのかは分からない。どうしてなのだろう？

「御免、遅くなった」

「いいですよ、僕も今来たところですから」

「嘘。少なくとも二十分は待たせた」

彼と一緒に帰る約束をして、急いでかつ丁寧に植物の手入れを終え、走って校門に向かうと、彼は私の方に向かってそう言ってきた。

でも、流石に三十分前に約束したのに、今来たところ、という嘘は直ぐにばれる。気持ちは嬉しいけれど。

「でも何でいきなり、一緒に帰ろうなんて言ったんですか？」

「一緒に帰りたいから」

これは紛れもなく自分の本心だ。まだ、彼と一緒に帰ってない、と思った時に、何故かはよく分からないけれど、一緒に下校したいと感じたのだ。

すると、彼は私の方を少し難しい表情を見てくる。

「ひょっとして、迷惑だった……?」

そう考えた瞬間、とても悲しくなった。

「いや、あ、え」

彼は思い切り言葉に詰まる。やっぱり、そうなんだ……。

「迷惑、なんだ……………」

目が熱くなり、鼻の奥がツンとする。

「いえ、迷惑なんかじゃありません！本当に！」

彼はそう叫んだ。でも、慌てながらなのでまるで説得力がなかった。

彼は優しい。だから、嘘をついて、私を悲しませないようにしているのだろう。

私の気分はどんどん沈んでいった……………。

「あら、二人とも、おアツいですね」

私が、もう少しで泣きそうになっていると、友達の京が話しかけてきた。

友達の言葉で我に返り、涙をこらえた。

京と別れた後、私達は一緒に帰った。その間も私の気持ちは沈んだままだったが、表に出さないように努めた。

それに、何故か、分からないけど、京を見て河合君が少しにやけているのを見たら、更に、落ち込んだ。

やっぱり、ああいう娘が好きなのかな……………？

京が可愛いのは間違いない。これは断言できる。だから、彼が惚れても、……………仕方ない。仕方ない、のだけど……………。

何だろう、この胸のもやもやは……………？何だろう、胸を締め付けるよ

うな感覚は…？

「自慢できるほどの家じゃありませんけどね」

「ううん、良い家」

今は河合君の家の前。河合君の両親を見て、失礼だけど安心した。馬鹿な親は私の家だけじゃなかったみたい。

河合君の家の両親が車で何処かへ行ったのを見送り、そろそろ帰ろうかと思っていた時

「家まで送っていきますよ」

「別に良い」

彼の提案を私は断った。正直に言うとは驚いたし、とても嬉しかった。彼は送ってくれると言ったのだ。

迷惑だと、思われて、ないのかもしれない。そう考える事が出来た。それでも断ったのは、やっぱり彼に迷惑をかけたくなかったからだ。

でも。私は車の去った方向をじつと見つめる。あの両親を見た時、あの仲睦まじそうな両親を見た時、私は少し羨ましいと思っただ。

河合君と何処かに遊びに行きたい。と思った。私は一度頷いた。

よし、誘ってみよう。断られたら怖いけれど。やっぱり迷惑だと思われている、と分かるだけかもしれないけれど、それでも、それでも

「河合君」

「な、何でしょうか？」

私は、彼と別れると、走って家に逃げるように帰った。

多分、今の私の顔は赤い。トマトのようになっていいるだろう。そんな顔は誰にも、特に彼には見られなくなかった。

家に帰ると、ただいま、とだけ言つて、自分の部屋のベッドに横たわり、赤い顔を隠すために枕に顔を埋めた。

少し苦しいが、それでも顔をあげる訳にはいかない。少しでも気を抜けばニヤついてしまいそうだ。

数分たった後、顔の熱がある程度冷め、枕から顔を離した。

「迷惑に、思われてない……………！」

そう呟くと、また顔が熱っぽくなり、再び枕に顔を埋める。

彼が快諾してくれた、快諾してくれた！

そう考えるだけで、気分が良くなる。少し足をばたつかせるなど、自分にしては珍しい行動を取ってしまう。

それ程、自分は浮かれていた。そして、結局私は夕飯の時間まで、枕に顔を埋めたままだった。

「さ、早苗、葵の奴どうしたんだ……………」

「さ、さあ？」

「~~~~」

私は夕飯の時も、常に上機嫌であり、自分の分の食器を洗う時にも鼻歌を歌う程であった。

そんな、私を両親は奇異な目で見てくるが、そんな事はどうでもいいと感じた。

夜、どうも気分が向上したままで、なかなか寝付けなかった。昔、遠足の前の日でも熟睡できた私だが、全く眠気も来ない。

しょうがないので、明日着ていく服などを考えた。どういう服が良いのだろうか？やっぱり可愛い服が良いのだろうか？でも、ファッションに疎い私には、そんなに服に選択肢がない。なら、やっぱり自分らしい

こうして、夜は更け、結局寝れたのは午前三時頃だった。

朝、七時に私は目を覚まし、眠い目を擦りながら、昨日考えていた服に着替えた。全体的に黒とか紫の大人っぽい感じにまとめてみた。そして、首元にスカーフを巻く。

私には可愛い系は似合わないだろう、という考えを元に、私が出る最高のオシャレを試してみたが、彼はどう思っただろう？

寝癖を直すためと、部屋の鏡の前で髪をといっていると、玄関の辺りが非常に騒がしかった。何かあったのだろうか、私は玄関に向かった。

「お母さん、お父さん、何かあった？ あっ」

「あっ」

玄関には制服姿の河合君がいた。私は思わずお母さんの背中に隠れる。まだ寝癖も残っているだらしなない恰好で彼の前にでてしまった……。

少し悲しくなりながらも、何で彼が家に居るのかを聞いた。

「そうそう、待ち合わせ場所を決めるのを忘れていたよな？」

「あ」

確かにそうだ。決めたのは一時から商店街で買い物と言う事だけ。昨日は、赤い顔を見られたくなく、急いで家に帰ったから決めるのを忘れてた。

その後の経緯を彼はかいつまんで話してくれた。聞けば聞く程、申し訳なくなってくる。私から誘ったのに。

どうせなら今から行こう、と言う話になり、私は急いで、身支度を整え、朝食代わりのヨーグルトを食べた。そして、玄関のドアの前で、二回深呼吸をした後、ゆっくりとドアを開けた。

そこに居たのは、股間を押さえて悶絶するお父さんと河合君の姿。何があったの？

番外編・赤い顔を見せたくない（後書き）

女性の一人称は難しい……。

彼女を可愛いと思ってくれたら幸いです。

## 5・これぞ死の方程式（前書き）

な、なかなか商店街についてくれない！そして、こんなんで読者は喜ぶのか。はなはだ不安な六話目。

追記

活動報告始めました、各話の経緯や皆様への質問がありますので時間があればみてほしいです

## 5・これぞ死の方程式

僕達は、今、商店街に向かうため駅に向かっております。しかし、何度思い返しても悲しい。股間を押さえ悶絶しているところを秋月さんにマジマジと見られるとは。

……………どなたか、良い樹海を知りませんか？

「河合君」

「良い樹海を教えてくださいませんか、秋月さん！」

「……………？一体何の話？」

あなたはニッシーの様に人の心は読めないのですか。というかそれが普通なのですが。

それにしても、こんな事になるのであれば、制服じゃなくて私服で来れば良かったです。女の子と遊びに行くのに制服って……………。でも、制服じゃなかったら、秋月さんのご両親とひと悶着あったかもしれないし　　ウウウウ。

彼女の寝癖はもうなくなっており、先程の服装と少し小さめの鞆を両手にぶら下げています。

ん？彼女の口に何か……………ついてますね。ヨーグルトのようです。朝御飯に食べたのでしょうか。

僕は常備しているハンカチをポケットから取り出します。ここが、僕のハンサムたる所以（文句は認めません）。

いや、だってね？男子でハンカチ持ってきている人って案外いないですよ。大体の人はトイレから出たらズボンをハンカチ代わりにするのです。時々洗いもしない奴もいますが、

僕はそんな情けない人間とは違い、ハンカチとティッシュを常備するようにしているのですよ、昨日から。でも、他には財布しか持ってきてません。急いで出てきましたから。そのせいで、先程秋月

さんのお父様に”避妊道具を持って行かんか！”と言われましたよ。別にいいかもしれませんが”妊娠したらどうするつもりだゴラア”と勘違いする始末。そんなことする訳ないじゃないですか、と言いつつ今の秋月さんの姿を見ると、少し自信を失ってきました……。ともあれ

「秋月さん、口元についてますよ」

「えっ……!?!」

キュツキユ

僕は彼女に近づき、口元を拭きました。これでよし。って、このハンカチ！今秋月さんの唇に触れました！これは、もう洗いません！不潔と思われようが洗いません！

僕はガラスを扱う様に丁寧にハンカチをポケットに収納する。

「じゃあ、改めて行きましょうか」

「……………」

「ん？あ、あの、秋月さん。もしもし？」

「……………」

まずい、秋月さんが固まりました。秋月さんが固まりました。重要な事なので二回言いました。

さっきから目を見開いた状態で瞬き一つしません。どうしたんですか、おーい！

「……………」

動かず。どうしましょうか？よし、いっちょ驚かせてみましょう！

「わっ！」

「……………」

だ、駄目ですか……………。な、なら恥ずかしいですが、ここは！

「氷のように固まりましたね。こおりやまいった！」

「……………」

……………ギャグがスルーされることほど悲しい事はないものです。  
どうせつまらないですよ！

な、何か、何か手を打たないと、彼女が動けなくなってしまう！  
なんてことはないだろうけど、少なくとも彼女とのデートの時間が  
減ってしまう！

そ、そうだ、一つ、さっきより恥ずかしいけれど、引かれてしま  
うかもしれないけど、手段がある！  
行くんだ！僕！

「あ、あ〜っと」

「……………」

ど、どもってしまっ！頑張れ、僕。ここで頑張らないと話が進ま  
なくて作者が困る。

さあ、言っんです！

「あ、葵、さん…！」

「……………！え、えっ……………？えっ？」

今、僕の事をヘタレだと思った方！そうですよ、ヘタレですよ！  
悪いですか！

ま、まあ、なにはともあれ、彼女は再起動しました。僕を一度驚いた眼で見つめた後、視線を左右させてます。

ふう……、まさか、睨めっこ（笑う以外に喋ってもいけないルール）で培ったこの裏技が役に立つとは。人生何が起こるか分かりませんね。

彼女は未だに落ち着かないようです。しかし、先程も言いましたが、デートの時間を死守するためにも、ここで立ち止まる訳にはいかないのです。

「じゃあ、いきましようか、秋月さん」

「え、えっ……？あ、うん」

呼び方を元に戻す。どうせヘタレですよ！

「あ、さ、さっき、な、名前」

「さあ、行きましよう。今すぐ行きましよう。光速で行きましよう」

恥ずかしい事はなかった事にする。これに限るのです。どうせ僕は以下略。

快晴の天気のもと、少し頬が赤くなった彼女と僕はようやく駅に着きます。

「えーっと、商店街は、あ、この”笑顔駅”ですね」

僕と彼女は笑顔駅の切符を買い、まもなく来た電車に乗りました。それにしても三駅で三百円は高すぎると思うんですが。

特に混んでいなかったたので座席につくと、そのすぐ隣に彼女が座ってきました。って、近いです！

少し横を見れば、彼女との顔の距離は数センチ。これは辛抱たまらん！って、違う！

僕はさりげなく、彼女から少し離れると、彼女はそれに合わせて移動してくる。や、やめて！これ以上近づかれると、うるさいくらいなってる心臓の音が彼女に聞かれてしまう！

僕の理性が持つかどうか甚だ不安なまま、このデートは始まってしまいました。

”えー、次の駅は理不尽、理不尽でございませう”

電車が走り出し、アナウンスが流れます。それにしても…そろそろ離れてくれないと、ハハハ。

よし、ここは交渉です。少し距離を話してもらおう様に……駄目です。言ったら、昨日みたく「迷惑……？」って聞かれます！涙目で！そして、この近くの男性陣に理不尽にぼこぼこにされて、痴漢という事で駅長に捕まり、裁判にかけられ、THE END。なんか、大袈裟じゃなくそう思えてきました……。

そう思う理由があるのです。さっきから、車両に乗っている男性陣のほとんどがこちらを殺気のコもった視線で射抜いてきているのです。

その目はさながら”美人とくつついてにやけてんじゃねーぞゴラア”と言っているようです。だって、仕方ないじゃないですか！これだけ近くに美人がいて、にやけない人は男性じゃありませんよ！

いたとしても、そいつはゲイ、ホモ、ガチ、シヨタのどれかです！  
僕にはそういう性癖はありませんから！

そ、そうです！引くが駄目なら押してみな、の精神に従って、逆にこっちから更に密着しましょう。そうすれば、彼女は否が応でも僕との距離を意識し、恥ずかしがって、少し離れる筈です！これぞ妙案！

僕は一度大きく息を吐くと、彼女のいる方に近づきました。う、彼女の肌の感触が！良い匂いが鼻をくすぐります。や、やばい！理性が焼き切れる！

「……………っ！」

彼女は驚愕したようで、僕の方を見ました。恥ずかしくて、僕は明後日の方向を向きます。

横目で彼女の様子を窺うと、彼女は恥ずかしいのか俯いています。そ、そうです。は、早く離れてください！理性が、本能に投了する前に！

っ！何で更に近づいてきているんですか！あ、良い香り……………っ！違って違います！僕は、離れて欲しくて近づいたのに本末転倒じやありませんか！

僕は彼女の方向を向くと、今度は彼女が、明後日の方向を向いています。恥ずかしいならやめてください！でも、この状況を嬉しいと思っっている自分が心底腹立たしいです！

っ！うわ、こ、この腕に、当たる感触は、お、男の聖地、ポ、ポイ……………、恥ずかしくて言えないです！

…ゾクツ！幸せ気分浸っている僕を射抜く先程のそれをこす殺気！しかし、それをも凌駕する彼女の身体の一部の感触。

そ、それにしても、ハハ、理性マジ切れる五秒前。皆さん、今からこの小説はノクターンへ向かいます。さようなら、さようなら。

「おい、何いちゃついでんだよ！」

その声に、僕はギリギリ我に返り、思わず彼女から離れます。それは彼女も同様で、彼女も僕から離れました。

あ、腕が寂しい……じゃなくて感触が無くなってもうた、でもなく！僕は声のした方向を向きます。

「ニ、ニツシー、何故ここに!？」

「お前が、秋月さんと何処かへ出かけるのを見つけて後をつけてきたんだよ！」

「ストーカーですか!？」

「違うわ!！」

そうでした、ニツシーはあのマンションの近くに居たのです。そもそも、インターホンだって、ニツシーが押したのですから。

そうです、復讐です！でも、秋月さんの前じゃ明らかに暴力的な事は出来ません。クソッ！

「秋月さん、こんな奴と何処かに遊びに行くなんて危険ですよ！」

「どういう意味ですか!？」

僕と一緒に遊んだからって何が危険なんですか！せいぜい、ホテルに連れ込むくらい……って違います！秋月さんの父親みたいなことを言ってしまったよ。

まあ、邪魔したくなるのは分かりますがね。ニツシーは秋月さんの事が好きなのです。ただし、既に砕けましたが。

その後、例の殺人事件が起こり、あるうことがこいつは秋月さんが犯人だと推理したのです。まあ、それが間違いだと分かり、事件の後日、彼は秋月さんに謝ったらしいですが。

もうそれは、とんでもなく壮絶な謝り方だったそう。聞いた話

によると”死ねばいいのよ”と言った彼女に憧れている女子が言ったのを聞いて”天皇陛下バンザイ!”と言いながら投身自殺しようとしたらしいです。

流石の彼女も必死に止めて、彼を許したそうなの。でも、そんな奴に僕達の事をどうこう言われたくはないです。

”間もなく、理不尽、理不尽でございます。お降りの方は座席の方にあるボタンを押してください”

バスですか！と内心突っ込みつつ、如何にして、ニッシーに復讐してやるうかと考えていると、秋月さんが口を開きました。

「河合君は危険じゃない。良い人」

「もう、話にならねー！眼鏡、次の駅で降りろ！」

そう言っつて、ニッシーは僕の腕を持って立ち上がりませようとうします。オイオイ、それはいくら何でもやりすぎです。

ピコンと閃きましたよ！ニッシーに復讐する妙案が！僕は、少し声帯をすばめました。

「キヤー、痴漢！」

出来る限りの女声を出した後、皆の視線がこちらに向く前に僕は驚いて力を失ったニッシーの手を彼女の腕に移動させました。

「痴漢がいるぞ！取り押さえろ！」

「ち、違っわ！俺は痴漢じゃ無い！」

「その腕が何よりの証拠！」

電車に乗っていた他の男性乗客が指さす先を見るニッシー。ニッ

シーの手は、秋月さんの腕に。それに気付いたニッシーは慌てて手を引つ込めます。

だが、時既に遅し！

” 理不尽く、理不尽でございます。お降りの方は足元にご注意ください”

「さあ、駅員のところに行こうな」

「は、離せ！俺は痴漢じゃない！」

「かつ井が待ってるぜ」

「それでも俺はやってない！理不尽だ！」

電車のドアが開き、ニッシーは数人の乗客に連れて行かれました。さよなら、ニッシー。後で覚えていたら弁解してあげますから。

「河合君」

「な、何でしょう？」

” 流石にやりすぎじゃ” とでも言うんでしょうか。十分あり得る。そして、” あんた最低” と言われて頬を叩かれ、今度は僕が痴漢扱いにされ以下略。

そ、それは困ります、と思いつつ、彼女の方を向きました。

「く」

「ひい、御免なさい！やりすぎました！やりすぎましたから！切腹だけはご勘弁を」

「……？靴ひもほどけてる」

マイペース！彼女は呑気ですね、と思いつつ僕は靴ひもを結び直しました。

ニッシー達と入れ違いに、ある程度人が乗ってきました。座席は全て埋まり、僕達は再びくつつく事を余儀なくされました。

ま、まずい、と思っていると、目の前にもう八十を越えているであろう老人が立っているが目につりました。

そうです！席を譲りましょう。そうすることで、僕は危機的（理性が）状況から脱し、更に彼女の好感度があがります！おまけ程度にお婆さんの好感度もついてきますが、そんなのどうでもいいのです。

「席、代わりましょうか？」

僕は、あくまで紳士的に老婆にそう問いかけました。

「年寄り扱いするんじゃない！」

理不尽です！だって、あなたどうみても八十こえて……。

「いた！殴らないでください！どっから出したんですか？その鍋のふた！待ってください！鍋の蓋は武器じゃありません！防具です！勇者の防具ですから！」

とても理不尽です。皆さん、人の良心は好意的に受け止めましょう。

”え〜、次の駅は、嫉妬、嫉妬でございます”

「あら〜、河合さんに葵さん〜」

僕が何とか、老婆を鎮め、何処かへ行くのを見届けると、間延びした声が聞こえてきました。

オウ、この声は聞いた事が、イエー、あります、ＹＯ！何でノリノリになっているかと言うと、それは勿論、この声の主が美人だからだ、ＹＯ、チエキラ！

「京…、どうしたの？」

そう、そこに居たのは昨日知り合ったばかりののんびり系美少女、日向京さんだったのです。

「この次の嫉妬駅に用があつて」

そう、笑顔で答える彼女は非常に愛らしい。秋月さんとは違った魅力がありますね。

それから、全体を白に統一した服装も、彼女の明るさに絶妙にマッチしています。

「嫉妬駅に？何の用ですか？」

「はい、何でも最近、美味しいお店が出たらしくて、興味があつたので行ってみようかと」

「あ、もしかして、次元店ですか？」

「はい」

「最近僕も行った事があるのですが、凄く美味しかったですよ、特にデザートなんか」

そう、僕も興味があつたので殺人事件で学校が休みになっている間に食べに行ったのですよ。

値段もリーズナブルで味も文句なし。強いて言えばマスターが頑固おやじでツケがきかない事ですかね。

そのおかげで、僕は一緒に来た奏に”トイレに行く”と言ってお店を抜け出す羽目になりましたよ。

その後に、奏のはなつた右ストリート、痛かったなあ。あいつ、サッカー部で筋力強いですから。

でも、何故か泣きながらだったのですよ。”どんだけ、皿洗いさせられたと思つてんだ！”とも叫んでましたね。

あまりに可哀そうでしたから、ニツシーのクラス（七組）に向かい、靴を探り自分の食事代の倍のお金を彼に渡し、何とか友情に亀裂は走らずに済みました。

ニツシーがその事で騒いだのは言うまでもありません。

「本当ですか？楽しみです」

「特に地獄パフェってのが絶品ですよ」

男二人で店に行き、パフェを食べるとは如何に？という突っ込みはスルーします。

こうして、僕と日向さんはそのレストランの話題で盛り上がりました。

”嫉妬、嫉妬でございます。お降りの方は足元にご注意ください”

そうこうしている間に嫉妬駅に着き、日向さんは僕達に笑顔を向け、電車を降りて行きました。

うん、にやけてしまうのは仕方ないと思っんです。だって、最後にみせた日向さんの笑顔、大体の人なら悶絶ものですよ？

「あ、そうだ、次元店、帰りに」

僕達も寄っていきましようか？と秋月さんに言おうとして言葉を

失う。

な、なんで、そんなに、泣きそうな顔をしているのでしょうか！？

あ、そ、そうです。先程日向さんと会話していた時、彼女、完璧に蚊帳の外でした！

で、でも、普通、不機嫌にはなっても、泣きそうにはならないんじゃないでしょうか！？

ほ、本当にそんな顔はやめてください！僕はあなたの泣きそうな顔なんてみたくはないのです！

そうこうしている間に、電車は出発します。そして、周りの皆の”何女の子泣かせてんだ！”って目で見てきています。

な、何とかしなければ！

「あ、あの、秋月さん」

「……………」

秋月さんに視線を外される。ど、どうすればいいんですか！？これから、僕達は何時間か一緒にいる訳です。でも、こんなに険悪なムードは御免です！

誰のせいですか！あ、僕ですか。

「き、機嫌、直して、もらえませんか……………」

「……………」

哀愁を込めた瞳でそっぽを向いたままの彼女。う、うわー、マジどうすればいいのですか！？人生でこんな経験した事ないから分かりません！

誰か、誰か、教えてくださいさ〜い！AT世界の中心。

こ、こうなったら、男のプライドかなぐり捨てても機嫌を直してもらいます！最初からないだろうというのはスルー！。

「ぼ、僕に出来る事でしたら、何でもしますから！お願いですから、機嫌を直してください」

「……………」

彼女はちらりと、僕の方を見ました。いけます！もうひと押し。

「ええ、何でもします！あなたは笑っている時が一番素敵で可愛いのです！その笑顔を見られるのなら何でもします！」

「……………！か、河合、君。ここ、電車」

ハッ！僕とした事が！こんな公衆の面前で臭い台詞を吐いてしまふなんて。皆が僕の事を軽蔑のまなざしで見えています。ヤメテ！。

僕は、慌てて口を押さええます。彼女はと言うと、顔をほのかに赤くし、僕の方をちらちら見てきます。

「え、えと……………」

彼女は、俯き、声を絞り出しています。ど、どうやら、彼女は僕にお願いを言うようです。でも”時価三千万の絵が欲しいの”とか言われたら、どうしようもありません。

彼女の価値観が普通である事を祈りながら、僕は言葉を待ちます。

「……………な、名前」

「え？」

「な…名前で呼んで欲しい」

”まもなく、笑顔、笑顔でございませす”

小さな声で、しかもアナウンスが重なり聞き取りづらかったです

が、僕の耳にはしつかり届きました。

た、確かに、それは僕にも出来ませんが……！その、恥ずかしいというか、え、えつと……。

「……駄目……？」

「っ！」

至近距離＋涙目＝死

前に似た方程式があったなー（前作）、と思いつつ僕は覚悟を決めました。

「あ、あ、葵、さん」

い、言ってやりましたよ、文句ありますか！顔が紅潮するのを感じつつ、秋月さんを見ると、先程より顔を赤くしつつも、まだ、何か納得がいかないような顔で僕を見つめてきます。

「……よ、呼び捨てでよんでほしい……」

無理！いや、それ無理！マジで無理！僕はヘタレなのですよ！ヘタレなのですよ！なのに呼び捨て？呼び捨て？

そんなの猿に数学の証明問題を解かせるぐらいに不可能ですよ！

「……駄目？」

至近距離＋涙目＋袖クイクイ＝DEATH

「あ、あ、あ、葵」

絞りに絞られた変な声で、ようやく僕はそう呼ぶ事が出来ました。すると、彼女もすこしぎこちない笑みを浮かべてくれました。よ、良かった。やっと笑ってくれました……。つ、疲れた。

” 笑顔、笑顔でございます。お降りの方は足元にご注意ください”

「…ありがとう、あ、晃」

## 5・これぞ死の方程式（後書き）

クーデレってこれであってるのでしょうか？良く知らないから正直分かりません。

何か、おかしいところがあったら教えてください。

そして、次回こそはデート本編に！

6・モ、モロはねえよ（前書き）

遅くなったうえに、短いです。スイマセン。

## 6・モ、モ口はねえよ

なんやかんやで、彼女と名前で呼び合うというアンビリーバボーな事になってしまいました。もしこれが誰かに知られれば……僕と彼女は恋人同士だと疑われ、クラスの男子生徒に断罪処分を受けます。アーツ、まだ死にたくありません！僕には家に嫁と、妻と奥さんが（二次元）！

とは言っても、実は僕、色恋沙汰にそこまで興味がなかったりします。そりゃ、彼女は綺麗だと思いますが、恋愛感情かと聞かれれば、ノーと断言できますね！……多分。

ところで、駅から出てから僕は笑いが止まらないのです。勿論、笑いだけを食べたからだとか、脇をくすぐられているからだとか、発狂したからだという訳ではありません。僕の横を歩いている彼女を見た瞬間に、鼻血を出して倒れていく男どもが愉快で仕方ないのです。ククク。

しかも、今日は天下の土曜日であるからして、買い物に来ている客で駅前には賑わっていますから、戦死者続出。しかし、皆”悔いはない！”と言いながら倒れていますからよしとしましょうか。でも、道端で横にはならないでください。

「見てください！人がゴミの様です！」

「……………晃」

何でしょう？あ、あ、あお、葵、…さん。……未だに慣れませんね。というか、心で呼ぶだけでも、どもるって僕はただだけシャイボーイなのでしょう？そもそも結局さん付ですし。

「いくらなんでも、やり過ぎだと思っ」

僕は自分がヘタレである事を再確認した後、横にいる秋月さんを見ました。やっぱりさっきのギャグは際どすぎましたか？でも、目が、目がくと同等の頻度で使われている有名な言葉ですし。なんなら、”これがラピュの雷だ！”にしましょうか？でもこちらの方が危なくありませんか？著作権的に。

「西田君の事」

今更！？あの一件から少なくとも十分は経っていますよ！マイペー  
ースもここまで行くと、行くと……可愛いじゃないですか！

ただ、彼女の眼は本気だったので、僕も真摯に答えます。さて、  
種明かしをしましょうか。

「良く考えてみてください、本当にニッシーが痴漢に間違えられたとすれば、被害者であるあなたも連れて行かれる筈でしょう？」

「あつ」

「そうです。どんな事件も被害者がいなければ、立証できないのです。痴漢ならなおの事」

もし立証できるのであれば、冤罪事件が瞬く間に増えてしまいますよ。冤罪は駄目、ゼツタイ。

でも、痴漢って、実は理不尽な所もあつたりしますからね。なんでも、男性が電車で携帯電話を使っている女性を注意したら、痴漢扱いされて有罪になった事件があるらしいですし。…恐ろしッ！

おっと、脱線しました。まあ、早い話が、先程ニッシーを連れ去った人達は、痴漢だと勘違いして彼を駅員のところに連れて行った訳ではないという事です。

「でも、だつたら何で……？」

彼女は小首を傾げています。どうやら、彼女の癖の様ですね。可愛すぎて、一般の健全男子には核兵器並みの威力を誇る癖ですよ。僕は少しクラリときながらも、周りで倒れている人達と同等の存在になりたくない一心で足を踏ん張り、転倒を回避します。そして説明を始めました。

「先程、ニッシーを連れ去った人達はお爺様の手先です」

「警視總監の？」

驚いた方もいるかもしれませんが。そう、この僕のお爺様は若い頃たくさん難事件を解決した名刑事であり、今は警視總監の座についているという超お偉いさんなのです。名を河合翔と言います。そして、僕はその人の血を受け継いでいるのです！凄いでしょ！さあ崇めなさい！……調子に乗ってスイマセン。

さて、その警視總監の僕のお爺様ですが、実は肩書とは裏腹に、物凄く子供っぽい性格をしており、僕の運動会の日には保護者リレーに参加し、ぎっくり腰で入院したり、僕に彼女が出来たと噂が流れば、探偵を何人が雇い、僕の周辺を調べさせるなどの事をしてたり。でも、その行動は全く、無意味でしたがね！何故なら、僕は、彼女が出来た事など、一度も、ありませんからね！彼女いない歴〃年齢ですよ！悪いですか！悪くありませんよ！僕は作ろうとしてないだけですから！その気になれば作れますよ！……きっと、恐らく、多分……、お願い、誰か認めて……。

まあ、つまりは、多分先程両親のどちらかがお爺様に、僕達が遊びに行く事を連絡したのでしょね。そして気になったお爺様は、人を雇い、僕達をつけさせたという訳ですよ。朝から、あの男達ついてきていましたからね。というか、警視總監なのに、そんな事をしているのでしょうか？

僕は、そいつらを追い払うのと、ニッシーに復讐するために、ニッシーをおとりにして、まんまと逃げおおせたという訳ですよ、ベ

イベー。

それにしても、いきなりの僕の”キヤー、痴漢”は驚いたでしょうね。警視總監の孫が、人を陥れようとしているのですから。警視總監の体裁を守るためにも、ニッシーを保護せざるを得なかったようですね。計画通り！

しかし、あの時のニッシーの顔と言ったら愉快で仕方ありませんでしたね。あの恐怖にひきつる笑顔は！クツクツク。…僕はSではありません。

説明を終え、一度息をついて、彼女を見ると未だに納得がいかないような顔をしております。スイマセンね、説明下手で。

「でも、なんでそこまでの？」

「え？貴女が言ったからじゃありませんか」

「私が？」

そうです、貴女言ったじゃありませんか？もう忘れたのですか？まさか、若天性アルツハイマー病？幾らなんでも早すぎじゃありませんか？

「言ったじゃありませんか、二人きりでって」

「あっ」

そう言うと、彼女は赤くなり俯く。どうやら、忘れてしまっていた事が恥ずかしいようですね。気にする事はありませんよ。僕は、”やーいやーい、お前の母ちゃん、出べそ”とか言うようなガキではありませんし。いや、本当に。

……

「あ、葵。まだ一人ついてきているようです」

「えっ？」

なかなかのテダレの様ですよ。今まで、全く気配を感じませんでした。でも、きつと朝からつけてきていますね。こんな事が出来るのは、奴ぐらいです。

しかし、僕は、奴をノックアウトできるアイテムを常備しているのですよ。僕はポケットに手をつ込み、一つの紙を取り出しました。それを開き、相手に見せます。

「ブツ！」

奴は鼻血を出し、周りの人達と同様倒れます。彼女はそれを見て目を丸くしました。まあ当然です。

僕は電柱の陰に隠れている、奴の近くに歩み寄ります。それにしても、何でこんなもので鼻血を吹くのでしょうか？

「奏、何でいるのですか？」

「モ、モロはねーよ！」

電柱の陰に隠れているのは奏でした。鼻を押さえながら、地面をのたうちまわっています。

しかし、こんな線の何処が良いのでしょうか？僕の先程見せた紙には一本の線だけが書かれています。昔奏対策をしようと、思考に思考を重ね、線を書けばいいのではという結論に至り、一度他の線を見せたところ”ツ、ツンデレはねーよ！”と言って鼻血を吹き出しておりました。

これは使える、と思ったのですが、一度見せると免疫ができるようで、鼻血を出さなくなり、毎回違う線を書きポケットに入れておきます。しかし、三十メートルも離れているのに良く分かりましたね。今回のコメントは、モロ、ですか。全く理解できません！

「さて、何で、こんなところに居るのですか？」

「も、もつと、自分の身体を大切に、だがそれが良い！」

「何かいい残す事は？」

「ま、待ってくれ！俺の家には法線と言う名の嫁と、奥さんの斜め23・4度の斜線と、妻の車線が！」

嫁、奥さん、妻って同じじゃないですか！自分を柵に上げるのはいけない事です、うん。というか家に車線って、どんだけですか？さあ、どうしてくれようか、と僕が思っていると、彼女が後ろからやってきました。うん、前にも言いましたが、小走りをしている姿も素晴らしい。

「何で、榊君が？」

何故に、僕に聞くのですか？葵。

6・モ、モロはねえよ（後書き）

次は早く更新したいです（あくまで希望）

## 7・一次元萌えと温暖化の因果関係（前書き）

何とか速攻で仕上げました。というか夜に書いたほうが、スラスラかけるのは何故？

## 7・一次元萌えと温暖化の因果関係

蠟燭や、鉄の処女を使い拷問を重ねた末、奏は僕達をつけていた事を白状しました。

まず、朝に「次元店に行こう！そうしよう！」と考えた奏は、駅に向かいます。途中で何人かの線をナンパしたのにフられ、失意に浸っていると、駅で僕達を見かけたそうです。

自分はフられたのに何事か！と考えた彼は、尾行を始めたとの事。早い話が嫉妬です。嫉妬乙。

そんなこととして背徳感はなかったのですか？と僕がきくと、レツッ背徳と返されました。意味分かん。

僕はそんな奏に哀れみを覚え、ここから立ち去らさせるだけで、特に咎めない事にしました。流石、優しい僕。

「帰る代わりにその紙クレー！」

そう言っつて僕の手の中にある、先程の奏を仕留めた紙を指差します。僕はそれを笑顔で、奏に差し出しました。

ビリビリ

「うわあああ、破るなあああ！」

自分で書いた紙をどうしようが僕の勝手です。

その後、僕は拗ねて帰らない、と駄々をこね始めた奏に蹴りを入れ、段ボールに詰め、近くの川に流しました。誰かいい人が拾って

くれるといいです。商店街なのに川がある。ここは良いところですよ。

そして、僕達は本格的に商店街で買い物始める事になりました。ちなみに奏を処刑する間、彼女はじつと僕を見ていましたが、終わると、”行く？”と聞いてきたただけでした。うん、マイペース。

しかし、色んな物がありますね。右も左も商店ばかり。”新商品入荷”や”今話題のクラの新アルバム”、”遊 王カード90パーセントOFF”など人目を引く広告が多いです。さて、何処に入りますしょう？

「何処か行きたいところはありますか？」

「まかせる」

オウシット、これは僕を試しているという事でOKですか？”どれだけ、私を楽しませられるのかお手並み拝見しましょうか”と心の中で思っているのでしょうか？…いや、有り得ないか、彼女に限って…このギャグ何回目？

ところが、この僕ときたら、女性と一緒に買い物に来たことがないですよ！デートなど初体験！そんな僕は何処に行けばいいか皆目見当が付きません！ナンテコツタイ！

服屋はどうでしょう？…女性用の服が売っているところに行くのは…抵抗があります。では、喫茶店！…まだ九時です。

じゃ、洒落た店が思いつきませんか。ここは無難に行きましようか…。

「なら、あそこの本屋に行きましょう」

「分かった」

僕の趣味は読書であるからして、よく本屋にはお世話になってい

るのです。一応、彼女も読書を時々嗜んでいるようなので少なくとも外れではないと思います。

店内に入り、漫画コーナーに行きそうになって慌てて方向転換し、ラノベコーナーに行こうとした足を手で止めたりするという痴態をおかす僕。彼女も奇異な目で僕を見つめてきます。ヤメテ！。

この店、そこら辺の本屋とは比べ物にならない程大きく、かなりの品数があります。ただエロ本コーナーがな、ゲフンゲフン。

普通の文庫本コーナーに立ち寄り、陳列されている本で欲しいものがないかを物色します。

「晃」

「何ですか？葵」

オウ、何時の間にかドモらずに名前が言えるようになってます。僕ってこんなに女たらしだったでしょうか。

「晃は、どういう本を読むの？」

「うーん、そうですねー、この中だったら”一次元萌えと温暖化の因果関係”というのが興味をそそります」

「そう…」

いや、本当に興味を引き付けられるタイトルです。作家名はきいた事ありませんが。誰でしょうね？榊奏って。

葵は何を思っただのか、じっとその本を見つめます。

「どうしました？」

「覚えておこうと思って」

「何をですか？」

「晃が、どんな本を読むのか…」

そんな事を覚えてどうしようというのでしょうか？僕の個人情報を知りつくして、僕を呪い殺す材料にしようとしているのでしょうか？

「それなら、今度僕の持っている本をいくつか貸しましょうか？」

「いいの？」

「ええ、どれくらい貸しましょうか？」

「全部」

それは流石に無理です。家には官能小説もありますからね。

結局、僕達は何も買わずに本屋を後にしました。何も買わないなんて、冷やかしか！、と言われるかもしれないがね。でも、例の本をレジに持っていったら悲しい事を言われたのですよ。

「これはお客さんには売れませんね」

「何故ですか？」

「あんだ、まだこれを読める年齢じゃないし」

年齢制限だということのか！？R18だということのか！？

「R10だからあんだにやまだ早い」

R10って何ですか！？というか僕は中学三年生ですよ！14歳ですよ！学校の制服着ているでしょ！ホラ！

「それにしても最近の小学生は背が高いねー」

だから中学生ですって！確かに多少童顔ですけど、少なくとも小

学生に間違えられた事はありませんから！

と言うような事があり、結局買えませんでした。オウオー、ナンテコツタイ！

ところで、今の時刻は十時半です。先程、店内で物凄く論戦になりました。時間をくつてしまいました。

その間藝はほとんど蚊帳の外でしたが、なにやらずっとクスクス笑っていたのを覚えています（特に僕が小学生と間違えられた瞬間）。論争が終わった後、僕が待たせた事を謝ると、寛大な心で許してくれました。

「次は何処に行きましょう？何処か行きたいところはありますか？それとも、またお任せですか？」

「後者」

校舎はこの近くにはありませんよ。……つまりないダジャレ言うて、サーセン。

さて、何処に行くかPART2。しかし、今回は悩みませんでしたよ。何故なら、そこに映画館があるからさ！

「じゃあ、映画でも見ますか」

「うん。何を見る？」

「何か見たいものはありますか？」

「任せる」

オウ、またかよ！ そうですねー、普通、こういうのはラブストーリーを選ぶのですが、そう言うのは僕の性には合いませんから。

”シーモネーター”も、ウーン、女性と一緒にこれを見るバカたれはいないでしょうし。何といっても、劇中の台詞の半分は”ピー

ッ”とかだし。

”ここは、ホラーに挑戦してみましようか？”着信無し”とか。でもなー。ホラー苦手ですしね。昔、子供の時に悪戯をしたお仕置きとして深夜に柱に括りつけられてホラー映画を延々と見せられてからは、ウマシカ、もといトラウマなのですよ。

ならやはりここは”ネコと子供の愛の物語”辺り行きましようか。このペット愛ものなら女の子受けもしますし、妙に気取った奴より見やすいでしょうし。なによりネコミミ萌、ゲフンゲフン！

彼女も承諾し、これを見る事に決めたのですが、放映時間から考えて、先にお昼ご飯を食べたほうがよさそうです。

と言う訳なので、洒落た喫茶店に向かったのですが……

ガチャ！

「カップル」

ガチャ！

「だと！」

ガチャ！

僕達が入って来た瞬間、店の客、及び店員が全員立ち上がり、何故か僕達の方を見ってきます。

え？何？僕、この店”には”何もしてない筈なのですが？流石の彼女も、驚いたようで、僕達は玄関口で立ち尽くすしかありません。店内が静寂からざわつきに変わると、一人の髭を生やしたムッシュが歩み寄ってきました。オウ、そのジャムおじさんを彷彿とさせる帽子から察するにコック長の様ですね。

「へい！」

いや、あんたどう見ても日本人なのに、へいって。しかも声爽やか。

「カップルでここに来たという事は、このイベントに挑戦するという事で、よろしOK?」

そう言って、彼は、一つの紙を僕の顔に押しつけました！息がー！

「オウソリー」

ソリーね。ソリーって誰ですか。そう思いつつ、僕はその紙を手に取り眺め、そして、愕然としました。

僕が固まったのを見て、葵は僕の手元を見てその驚くべき内容を呟きました。

「カップル特別イベント」

何故こんなバカップルみたいな事をしなければならぬのですか！？

## 7・一次元萌えと温暖化の因果関係（後書き）

ふう、ようやくデートらしくなってきました。

8・動揺しないわけがない(前書き)

多少遅くなって申し訳ありません

## 8・動揺しないわけがない

カップル特別イベントとは、如何に？それは、簡単にいえば暇人がカップルがいちゃついているのを外から見て、からかうという真にくだらないものであります！

大まかに、三つのステップに分かれているようで、それぞれのステップをクリア毎に懸賞品が貰えるとか。

「懸賞品って何？」

葵がコック長らしき人に尋ねる。確かにそこ重要。たかだか、くだらないフィギュア系統のグッズで人生を捨てたくありませんよ。

「ハイ、まず一つ目をクリアすると当レストランの一回分の食事を無料にします！二つ目クリアすれば、この商店街のどの店でも使える五千円分の商品券、そして」

「待つてください！商店街って……まさかと思えますけど、この企画って」

「ザッツライト！私たちが企画し、バックアップに商店街全体にコネクションがアリマース！」

暇人！暇人の集まりや！アホや！商店街全体がこんなくだらぬ事をするなんて、この町オワタ。

ただ、コック長の話によれば、ここには”シヨタコン喫茶”や”萌え萌え飲食店”などがあるそうで……。それ以上は聞く事に嫌悪感を覚え、慌てて止めに入りましたよ。

「それで三つ目は？」

「夏に彼氏彼女との甘いひと時をプレゼント、海辺の民宿”浜茶

屋”ペア、二泊三日、三食昼寝つきご招待券」

レベル高っ！いきなり値段が跳ね上がりましたよ！何これ？何でこんな事にここまで金かけてんのよ、この商店街。そもそもさつきからカタコト風味の喋り方だったのに、いきなりスラスラ喋ってんじゃねーよ、コック長！

こ、これは、参加する価値があるかもしれません！やるは一時の恥、ここでこの招待券を手に入れば葵とのひと夏の思い出が……やべヨダレ。

ヨダレを葵に気づかれないうちにハンカチで拭う。ふう、何とかバレませんでした。待ってください？これは葵の口を拭ったハンカチ 間接キスやないか！キスやないか！関節は内科！自分が何を言ってるか分からないやないか！？

……駄目だ、この程度で動揺しているようで三つもミッションを遂行できる筈がありません。ここは丁重に断りますか。くだらないですし、なにより彼女も僕と一緒に旅行なんて行きたくないでしょうし、ハハ……。

僕の内心の葛藤が治まると、ほぼ同時でした。彼女が口を開いたのは。

「……………一つ目は何をすればいいの？」

その言葉を聞いた瞬間、コック長、及び店内の客、また何時の間にかやら群がってきた野次馬が歓声を上げる。痛い、痛すぎる。

葵、まさかやる気？こんなくだらない事を？しかも、全部過程を遂行しても僕との二人きりの旅行ですよ？僕を惑わせて楽しいですか？

僕は疑問しか出ません。葵はこういう事に興味がないとばかり思っていましたからね。しかし、葵の表情は真剣そのもの。実はやっぱりお年頃の女の子なのでしょうか？一度誰とでも良いからこうい

う事をしてみたいとか？あり得ます。

葵「年頃な女の子と僕が自己完結して納得していると、第一のミッションが発表されました。」

「題して」二人で一緒にキヤツキヤ

「タイトルは結構です。ルールだけ言ってください」

「言わせてよー！」

「だが断る！」

男にそんな目で見つめられても喜びませんよ。ノシつけて返してあげます。

コック長は（今思いましたが、何故店長じゃなくてコック長？店長涙目）袖で涙を拭い、抑揚を押さえて答える。

「まあ、ようは、皆の前で、二人で、一つのハート形のストロークで巨大なコップに入ったジュースを制限時間以内に飲み干そう、というものです……」

「いつペン死んでください」

心底つまんなさそうにいうコック長を地獄に放つ一言。これを発したのは誰でしょう？僕以外いる筈がありません。何を言うのですか、このキチガイ。

まず、最初からいきなり難易度の高さが尋常じゃありません。一回目の商品は、たかだか食事代一度チャラというしょうもないもの。僕はお金持ちですからね。食事代一度ぐらいの出費など痛くも痒くも……御免なさい、見栄張りしました。

で、でも、今日は大丈夫なのです。何故かって？それは財布に樋口さんが二枚いるからですよ。いやー、昨日人助けをしたのでそのお礼に貰ったのですよ。人助けはするものですねー。そして、一万円を要求しないところが僕の優しさ。

なんか、泣きながら”俺の事燃やしたくせに金まで取るとは鬼畜の所業！”とか聞こえました。が、幻聴、幻聴。  
つまり、今日の僕は全くお金に困っていないので、こんな事やるだけ無駄無駄無駄！

「はい、これがお飲みになる当店自慢のトマトジュースです！」

よりによってトマトか！トマトなのか！？普通こういうのって爽やかな奴を飲むんじゃないのか！？これって僕の偏見だったのか！？というか作者がこういうのを呼んだ事がないから分からないのが一番でかい！分からんのならせめて何かで探せや！

作者の努力不足を嘆きつつ、運ばれてきたコップをじっと見てみる。それはもう舐めるように。底が丸い器に足がついている形（足と言って正しいかは良く分かりませんが）です。しかし、その器部分の大きさが尋常じゃありません。そして、それにこぼれんばかりに注がれたトマトジュース。軽く二リットルは入ってそうです。というか、絶対入ってます。

トマトジュースを二リットル……、オエ！あのくどい味を二リットル（葵と一緒にですが）も飲むのはきついです！

しかし、そんなことより、問題はストロー。このストロー、無意味なハート型であります。そして、ハートのへこんでいる部分から二つに枝分かれています。……一緒に飲むという事で、二人用のストローで飲む覚悟は既にできてましたよ……。

ですが！

「何故に、枝分かれていまする角度が百八十度ではなく六十度ほどなのですか！？」

たまにギャグ漫画等でこういうストローを時々見かけますが、普通は向かい合って飲むために百八十度にストローの枝が分かれています。

る筈です。

僕の最もたる主張を聞いたにも関わらず、コック長はとても軽く答えました。

「コレーは、貴方達がイチャつくのをからかって我々が楽しむ競技デース！なのーに、向かい合って飲む行為を横から見ただけなんて面白さの欠片もありません。まさに、愚の骨頂！つまーり、二人で隣に座りなガーラ、我々の方を向ーき、これを飲み干してもらいまーす、OK？」

「だが断」

「制限時間は何分？」

葵！？何を言っているのですか！？こんな人権もなくでもない事やる気ですか！？それともあれですか？あなたには羞恥心と言うものがないのですか！？それとも、僕を地獄に突き落としたいのですか！？

ホラホラ、やるなんて言ったから、コック長も周りの人の目も夜空に浮かぶ星に負けず劣らず輝き始めたじゃありませんか！……でも、どんなものでも、あなたの瞳より美しいものなどありませんよ、葵……こんな事を考える自分、…キモッ！

「制限時間は、ファイブミニッツ（五分）！OK」

「嫌で」

「分かった」

僕に、僕に否定権を！僕はやりたくないのですよ！こんなバカッブルみたいな事！親の姿見るだけでこりこりなのですよ！誰か…僕の味方を……。

「アナータの味方してやる奴なんていないから安心してくださー

い

……このコック長も、デフォルトで心を読む機能がついているのか。いや、今の僕の表情に絶望の色が濃く表れていたからでしょうか、ハハ。

反抗する気力もうせた僕は、流されるまま、一番目立つ喫茶店の中心にあるテーブルに向かいます。もう何でもコイヤ！

備え付けの椅子を引き、葵を座らせた後、その横の椅子に腰を落ち着かせます。そして、テーブルの上に先程のコップをセツティングする係員。係員の哀れむような瞳が痛いです。

そして、僕達の向かい側にこれでもかという程の人間が立っています。軽く百人はいるようです、暇人どもが。

「ほら、そこ！フラッシュたかない！そして、後ろの方！一脚使つてまで撮ろうとしない！ここは記者会見じゃありません！」

「はあ！？何言ってるんだよ！？撮ったものを後から今日ここに来ない奴に見せる義務があるんだよ！それで皆で見て、こんな馬鹿な奴がい　　こんな面白い奴が　　こういう微笑ましいカップルがいたという事を伝えてお互いに笑い転　　思い出話に花を咲かせるのさ」

「侮辱にも程があります！僕達にだって人権はあるのですよ！」

「バカツプルに人権はねー」

「何ですか！？その人権思想は！？ブーケトスが独身者に対する人権侵害だとか言ってるのと同じレベルですよ！」

「笑いの種にもならないバカツプルは公害、これ世界の常識」

「ふざけないでください、というか、葵も何か文句を言ってくださいよ！」

「晃、早くストロー啜えて」

助けを求めて横を見ると、葵は既にストローを啜えて臨戦態勢。何故ここまでマイペースでいられるのか不思議でなりません。僕は恐る恐るもう一つの枝の方に口を近づけます。しかし

「ッ！」

僕は思わず、身を引きました。いや、だって、ね？頬がくっついてたんですよ？女の子と手を繋がなくなっただけなのに、頬がくっついてしまえば、誰でも動揺しますよ。

しかし、世の中、こういうことを理解してもらえない事って少ないものなのです。

「晃、どうしたの？」

「おい！何やってんだ、早くしろ！」

「だ、ただだ、だって頬がくっついて」

「そうなるようなストローを特注したのだから仕方ない」

「確かにそれは仕方ない……って、違います！？なんでこんなものわざわざ特注してるんですか！」

「頬がくっついたぐらいでなんだ！？男ならビシツといけ！俺達だって暇じゃねーんだよ！」

いや、絶対暇人でしょ！なら来ないでくださいよ！まじあんたいらない子だから！

「あ、葵、助け」

「待たせるのは悪い」

僕の助けをしてくれる人は、誰も、いなくなつた。

完

いや、ジョーク。ブラックジョークですよ。皆さん。こんな中途半端で終わらせるほど、僕のへそは曲がっていません。

さて、勇気を振り絞り、僕はストローを啜えました。うう、ほっぺが柔らかけー。やばい、頭に血が上ってきました。ああ、今なら死んでもいい。

「では、五分間で頑張って飲み干してください。よーい、ドン」  
ストップウォッチを持ったコック長の掛け声とともに、僕達はトマトジュースを吸い上げます。

一刻も早く、飲み終えましょう。そして、こんな羞恥心を刺激するイベントを終わらせましょう。でないと

「いいぞ、もっとやれー」

「うおーい、もっと頼くっつけろや！」

出来ませんよ！そんなことできる訳ないでしょう！もう、嫌だ、泣きたい。でも、ここで泣いたら、一生笑いにされます。それは僕のささやかな（ここアンダーライン引いて）プライドが許しません。

「おい、手がお留守だぞー」

「そうだ、肩抱けや！眼鏡」

ハ、ハアアアアア！で、出来るか〜！

「やれや！面白くねーだろ！」

す、スルー決定！こんなリクエストに答えていたら身が持たない！

「ちなみに客からのリクエストは、実行する義務がアリマース  
！」

「ちょ、出来るわけありませんよ！？そんな事」

思わずストローから口が離れ、慌てて、再びジュースを飲みほしていく。自分の突っ込み気質が憎い。

「じゃなきゃ、懸賞品出ません」

な、何たる鬼畜！お前の母ちゃん、絶対出べそでしょ！そうに違いない。前回に僕はこんな事を言う程ガキじゃないとか書いた気がします、気のせいだと思ってください。

流石に、ここまでやって、懸賞品が出ないのは虚しすぎるので、恐る恐る、僕は右手を彼女の肩に乗せました。

「……………ッ！」

彼女は触れた瞬間に少し肩をびくりとさせましたが、黙々とジュースを飲んだままで、何一つ言ってきてません。

「あんた、何、人の肩勝手に触ってるのよ！」

とか言われたら、もうニツシーを道連れにして死ぬしかありませんでしたので、安心しましたよ。

しかし、このトマトジュース、味が酸っぱいような甘いような…、とにかくくどい。口に纏わりつくような感覚がして、正直言って直ぐに飽きました。

でも、食事代をチャラにするためにも、頑張るしかありません。出来るだけハイペースで喉に流し込んでいきます。そして、周りの観客の声を受け流しながら、残りが後八分の一くらいになった時

「はい、残り一分ね」

「後、一分しかない……」

横の葵がそう呟きました。いや、後一分あれば、余裕ですよ。完璧！

あ、葵！こ、ここに来て、スピードダウンですか！？いや、今、一分しかないって言いましたよね？なら普通ラストスパートかけるところでしょう？なのに、なんで一気に飲むスピードが遅くなっているのですか！？

葵は急にやる気がうせたように、ストローをただ啜えた状態になりました。そして、刻一刻と迫りくる時間。これはやばい！

こうなりゃヤケや！飲み干してくれる！僕は顔の形が変わるぐらいに口に力を入れ、一気に吸い上げました。ま、間に合ってくれー！

「十、九、八、七」

うわー、間に合うか、いや、間に合わせるんです、頑張れ僕！

「三、二」

無理だ、間にあわねー！そう思ったその時でした。今まで、ス  
トロローを啜えているだけだった葵がようやく、復活したのです。

「ー」

「御馳走様！」

復活した葵のおかげで、ギリギリ飲み干す事が出来ました。とい  
うか、出来るなら途中で吸うのをやめないで欲しかったです。  
ともあれ

「挑戦成功！食事代無料の権利を手に入れました！」

や、やりました…！でも、どちらかというと疲れの方が大きいで  
す。ああ、もうドリンクいりません…。

僕は一度大きく息を吐くと、ずっと彼女の肩にかけていた手をど  
かしました。

「……あ」

何故か、彼女は残念そうに声をもらしました。何でしょうか？彼  
女が残念に感じる原因が分かりません。

「はい、これーがお食事券です！」

「？あ、ああ……どうも」

危ない危ない。一瞬汚職事件と勘違いしてしまいました。さっき  
からここがフラッシュでたかれまくっているのが原因に違いありま  
せん。

「では、第二ミッション！」

し、しまった！忘れてた！まだ、このイベントありました！？ヤメテー！

「この料理を彼女と一緒に食べてください。ただし！お互いにダーリン、ハニーと甘く囁きながら。そして、お互いに自分の分の料理は恋人に食べさせてもらーう事！」

こんなくだらない考えを考案した人に意見します。はっきり言うて痛すぎです。

8・動揺しないわけがない(後書き)

ああ、なんか書いている自分が痛い

## 9・殺意とはいついつこと（前書き）

いつの間にか、お気に入りが入りが十件もあつて恐縮の次第であるこの小説も、とうとう番外編を含め十話目。さて、あと何十話続くのだから…

## 9・殺意とはいついつと

僕が小学生の時でした。大人の僕は、道端に落ちていたR18の代物を見て呟いたのです。

「ポイ捨てとは何事ですか！けしからん！」

僕は慈善に満ちたマイハートに従い、地球をクリーンアップするため、仕方なく、本当に仕方なく、そのブツを家に持ち帰ったのです。やましい心など、一切、ありませんでした。

しかし、ほどなくして僕の父親がブツを僕の部屋から見つけてしまったのです。しかも

「俺の息子は大人になりました〜！皆さん、我が息子に祝福を！」

とメガホンを持って町内に広めてしまったからさあ大変。学校に行けば”スケベ”と呼ばれ、教師には”ブツだせや！俺が使わなくて没収する！”と言われ、”私と良い事してみない？”とオカマに言い寄られるという恥辱を味わったのです！あの時は本当に引きこもろうかと考えましたよ。

ですが、今、僕は、それ以上に恥ずかしい事をしているのです。

「あ、あああああ、あ」

さて問題です、僕は一体何回”あ”と発音したでしょう？八回？いいえ、ケフィアです。

「あ、あ〜ん」

これは女性が出す艶っぽい声ではありません。僕の声です。期待した人は取り合えず、病院に行ってください。…誰に言っているんですか、僕は？

さて、何故僕がこんな声を出したのか？という疑問を持つ人もいるでしょう。いや、前回を読んでくれたお方であるならば、推測するのは容易かと思いますが。それでも説明するのが親切設計と言うもの。

僕は見知らぬ人にいきなり「あくん」と話しかける狂人ではありません。結論から言いましょう。この、あくん、とは口を開けてくださいという意味であります。つまり、食事中にやるあれです。見てて身体がむず痒くなるやつです。

そして、その相手は勿論女性でありまして、決して男性では無い事を忠告しておきましょう。男性にやるなんて鳥肌がたちます！汚らしい！

そう、今、僕がやっている動作の受け手はまぎれもなく、彼女、秋月葵さんなのです。というか、これだけの事を説明するだけなのに、こんなに文章を使っている作者は馬鹿です。

お箸でつまんだ御飯を、彼女の口内に入れて、葵が咀嚼します。うん、きちんと二十回噛んで健康的。

ちなみに、僕達のポジションはジュースを飲んでいた時と同じく隣に座った状態。そして、それを沢山の観客に見られる。DMやド変態、バカップルならばなんてことはないのかもしれないかもしれませんが、一般の思考を持つこの僕にはいささか恥ずかしすぎますよ。

しかもですね、僕はこの状況に少し慣れ始めてきているのです。恐ろしい！慣れ切ったら変態の仲間入りです！しかし、真に僕を困らせているのはその事ではないのです。

慣れ始める、と言う事は、逆に自分の身の回りに気を配る余裕ができるという事と等しいのです。そして、体制は先程言ったように、ジュースを飲んでいた時とほとんど変わっておりません。

ジュースを飲む時、緊張しすぎていてホッペにしか気がまわって

いませんでしたが、今、僕は他にも色々ヤベエという事実気付いたのです。

つまり、それは、葵と体の側面がピッタリ、隙間が無く、くっついていてという事なのです。椅子が寄せてあるからこそできる芸当…って違う！

想像してください。とびきりのS級美人の異性が、自分の隣に隙間なくくっついていたら、どうなりますか？それはもう、理性と言う名の石を本能と言う名の電気ドリルが容赦なく壊してくるのです。お、狼になる〜！

それなのに僕の理性が持つのは勿論、ここが公共の場である事、そして衆人環視の状況である事が大きいです。これが僕の部屋であれば、それはもうR17な事になりますよ。彼女が怒って。

「うおい、そこは”ハニー、あ〜ん”って言うところだろが！」

「そうだ、何で名前を囁かない!？」

ハニーは名前やない!と突っ込んでも仕方ありませんか…。そう、このカップル特別イベントは、相手に食事を食べさせるだけではなく、相手の事を”ダーリン””ハニー”と呼ばなければならぬという、考えた人を奈落の底にたたき落としてやりたくなるようなルールが存在するのです。

そもそも僕達はカップルじゃないんですよ？何で、そんな事をせねばならないのですか？そう思わないですか、葵。

「ダーリン、あ〜ん」

あえて…何も突っ込むまい。こうした状況を受け止める事で、人間は大人になっていくのです。

フォークで刺してある煮込みハンバーグを僕に向ける葵の表情は何時もの如く、クールフェイス。無表情と言う程ではないのですが、

やはり読み取りづらいです。まだ葵検定四級からは這いあがれません。

「あ、あゝん」

やはりどもってしまつ情けない僕は、ハンバーグを口に含み、ゆつくりと噛む。彼女が食べさせてくれたものを、すぐに飲み込んでしまつのは礼儀知らずですしね。

このハンバーグは、良く漫画である、とびきりうまい物ではなく、そこら辺の喫茶店にあるそれとほとんど味は変わらないようです。さて、なんでここで断言しないかと言いますと、正直、今の状況にまだ慣れ切れていなくて、ハンバーグを味わえる程の余裕が復活していないのです。つまり味が感じられません。御飯の神様、申し訳ありません、と心にもない謝罪を試みる。

「さあ、次は眼鏡、てめえの番だ、今度はちゃんとええよ！」

「なんなら”ベイベ”でもいいぜ」

それは断固拒否。し、仕方ありません。言つぞ！

「ハ、ハ」

が、頑張れ僕！

「ハチミツ！」

「おい！」

「ハツポウサイ！」

「てめえ！」

「ハクサイ！ハツパ、ハンコ、ハツケツビヨウ、ハハ、ハンパ、ハッスルハッスル！」

「もしもし、ここに気遣いがいます！今すぐ来て」  
「ま、待ってください！言いますから！それから気遣いは死語です！」

す、少しは心の準備をくれないのですか？僕は純真無垢な日本の清潔さを代表するような好青年なのですよ。照れぐらい許してください。

「ハ、ハ、ハニー、あ〜ん」

言いました！言いました！僕グッジョブ！しかし、その一方で僕は何か大切なものを失った感覚に襲われました。気のせいだと願いたい。

「あ〜ん」

それに対して、彼女は余裕。なんか憎たらしく思うと同時に、可愛らしくも思えてくるのはやはり美人だからなのでしょうか？

ウィナーを彼女の口内に入れます。こんなくだらない事は、早めに終わらせるのが得策。とにかく、早く食べてしましましょう。

しかし、そうは問屋がおろさないのが、このお店。周りの人がなにやら画用紙にマジックペンで文字を書いたものを見せてきます。まさか…

「この台詞を言いながら、次やって」

で、でで、ででで、デデデ、できるかー！一瞬大王の名前を言ってしまった自分を恥じますが、その画用紙に書いてある言葉を見てしまって正気でいられる訳がありません。そんなはずい台詞が言えるかー！そんな事、バカップルだって言わないだろ！

「言わないと、商品没収アーンドその料理の代金も払って〜もらいまーす」

「待つてください！僕達は一つ目の課題をこなしましたよね！？」

「……分かりました、ここは民主主義にのつとーて、多数決で決めましょーう」

「待つてください！もうそれほとんど民主主義じゃありませんから！僕と彼女対その他大勢で勝てる訳が」

「はーい、この件について反対の人、手をレイズアップ！」

「はいはいはーい！」

「反対はたった一人、以上によりこの件は可決となりまーす」

「り、理不尽です！というか、葵、せめてあなたも手を挙げてください！」

「はい、あ〜ん」

「あ、え、えーっと、あ〜ん、モグモグ………つて違います！」

このサラダ美味なり！ってこれも違います！なんだか今日は彼女に振り回されてばかりな気がしますよ。彼女に悟られないように小さくため息をつきます。

眼は口ほどに物を言う。この言葉を思い出しました。そう、皆の眼が語っているのです。”とつととやれや”とおっしゃっているのです。

命の危機すら感じる視線の中、美少女の様な繊細な心を持つこの僕が（だから、そこ！突っ込まない！）どうして耐えられるでしょうか？いや、耐えられる訳がありません！

だからといって駄々こねて泣くのは、僕のプライドが許しません！もう、僕の退路が一つしかないのです……。故に、仕方なく（こちらも多少なりともプライドに傷が付きませんが）僕はその台詞を読むしかないのです……。

「ああああ愛していますよ、ハニー、あ〜ん」

どもりまくった僕の様子を見て爆笑する野次馬。ああ、殺意ってこういうのを言うのですね。

対して、葵はと言うと、流石に恥ずかしいのか、頬を染めて、先程より小さく口を開けます。

「あ〜ん」

まるで雛鳥に餌を与える親鳥の心境です（これが分かる人間はいないでしょうが）。

前を見ると、コック長が笑いを噛み殺しながら、新しい台詞を画用紙に書き、それを掲げてきます。……今度はそんな台詞を言わねばならないのですか。そして、彼女の分の台詞を見て再び驚く。いや、これはねーよ！

彼女は野菜を飲み込むと、今度はハンバーグを箸でつかみ、僕の口元を持っていきます。

「ダーリン、あ〜ん」

「あ〜ん、モグモグ」

「美味しい？」

「ハニーが食べさせてくれれば何でも美味しいですよ」

おお、何時の間にか、すらすらと言えるようになっていた自分があります。こうして男は軽い人間になっていくのでしょうか？

しかし、問題は次の台詞。

「公共の場だから口移しができない。御免」

読者の皆様に聞きます。如何にバカカップルと言えど、こんな事を

平然と言う奴がいるでしょうか？いたら速攻で教えてください。そんな人がいたら、バカツプルが公害であるという事を認めましょう。……何故でしょうか？将来、僕は似たような事をやりそうな気がします。

さて、ここで画用紙に書かれた指令によれば、僕は”続きは家に帰ってからしましょうね”と笑いながら彼女の頭を撫でなければならぬようです。しかし、僕にそんな事が出来る訳

「続きは家に帰ってからしましょうね、ハニー」

ボクウウウウウウ！一体どうしたのですか！？身体が勝手に動いた！？怪奇現象！しかも、ハニーと追加している時点でノリノリである。

これは、あれですか？場の雰囲気酔ってしまったのでしょうか？つまりこのままいけば、場に流されて僕もチャラ男になってしまうのでしょうか？それだけは断じて阻止せねば！自分をしっかり保つのです、僕！

彼女の頭を撫でながら、僕の頭の中はただ一つの事で埋め尽くされてきました。

それにしても、彼女の髪、ふわふわである。

ホッペの感触などでも思ったのですが……、女の子の髪や肌って明らかに男のそれとは違う材質でできていると思うのですよ。

僕が撫でている間、まるで本物の猫のように、彼女は眼を細め気持よさそうな顔をします。なんででしょう、何か、男心をくすぐるような、この感情は！？

以上の事を幾度となく繰り返し、長針が一回りしたくらいで、よ

うやく全ての料理を食べきました。正直精神的疲労が凄い事に。こうして、商品券を手に入れた僕達は、第一の課題で手に入れた食事券で代金を払い、いよいよ最後のミッションを言い渡されます。取り合えず、さっさと終わらせて、映画館に行きたい。

「まさーか、第三ミッションに辿りつく人がいたーとは。大抵挫折するのーに」

コック長の台詞に、野次馬がうんうんと頷く。まあ、それはそうでしょうよ。正直今も死にたい気持ちでいっぱいですし。

「それで最後の課題はなんですか？」

どうぞせくだらないんでしょうがね。

「最後のミッションはとってもカンタン。その公園の中心で、二人の名前をお互いに何度か叫びあってもらうだけですから」

何処が簡単だ、このヤロ。

9・殺意とは「いついつ」と(後書き)

後から読むと凄く恥ずかしいといふこの罪

10・救いようがない天然（前書き）

遅れたうえに、短い事を本当に、済まないと思っている！

## 10・救いようがない天然

「はい、つきましーた！でーは、思いっきり名前を叫んでください！」

「できません」

こんな衆人環視の中でそんな痴態が出来る筈がありません！…さつき二回程しましたが。

でも、今は誰が何と言おうと出来ません！だってですよ？店に居た野次馬はせいぜい大人の年齢まで達してはいますが、ここは公園。そう、公共の場。つまり、何が言いたいかといいますともともと公園に居たお子様がこちらをじっと見てくるのです！滑り台の上とか、ブランコとか、鉄棒とかの近くからこちらを見てくるのです！やめて、この人達、何？みたいな目で見ないで！

「ママ、あの人達、何？」

「見ちゃいけません！」

「ママ、あの人達、何？」

「良く見ておきなさい、あれが駄目な大人の見本よ」

前者と後者、どちらの方が良い親でしょうか？僕は恐らく後者だと思えますが、できれば前者を選択していただけたい。この痴態を目撃する人間は少なければ少ないほどいいのです。…というか言われたい放題ですな。

もう嫌じゃ、とくじけそうな僕に追い打ちをかけるように、野次馬からの催促の視線。八方ふさがりとはこの事。

「ママ、あの人達、何？」

「えー、何処に居るの？」

「ほら、あそこ」

「何ヲ言ッテイルノカナー、ママニ八何モ見エマセーン」

とつとう存在を認めない母親まで出てくる始末。お母さん、どうかそのまま現実逃避しておいてください。僕を見ないで。

「おい、とつとと叫べや〜！」

横に居るサングラスをかけた、いかついおじさんが頂垂れている僕の小脇をつついてきます。ところでその格好、ちよい悪オヤジを意識していますか？

僕と葵は喫茶店のすぐ近くにある公園の、遊具に囲まれた中央のグラウンドのど真ん中で、向かい合って立っています。美人と公園にいる、なんて素晴らしいシチュエーションですが…、周りを取り囲む暇人（野次馬とも言う）のせいで全然楽しめません。むしろ苦痛。

そして、何故こんな状況に陥っているか？それはカップル特別企画なるものの最終ミッションのため。まあ、一言で説明すれば僕すべきことは”公園の中心で葵と叫ぶ”。おう、なんかパクリに見えるよ、母上。

つまり、今すぐにも

「葵ー！」

と叫べばミッション終了な訳ですが、それをすれば最後、人間としての大事なものを失う事請け合い。そうだ、今度このミッションをニッシーにやらせてみましょう。あいつも人間として大事なものを失……そもそもニッシーに相手がいるのでしょうか…？いるよね…、イケメンだもの。ああ、包丁が欲しい（危ない人発言）

やばい、今なら冗談抜きで「リア充死ねー！」とお腹の底から叫べる気がするZ E！

「他の言葉で叫んでも良いですか？」

「却下」

それなら、このやりどころのない思いを何処にぶつけなければいいのですか！？…八つ当たり良くない…。

これは彼女も相当まいっているだろうと思って、項垂れた頭をあげて様子を見ます。しかし、彼女は何時も通りのクールフェイスでありましたので、何を考えているのか、僕の力量では測りかねます。そうこうしている間に時間は刻々と過ぎていきます。ころなしに、野次馬の数も増えてきているようであります。まあ公園で人が集まっていたら興味を持って近づいてくるのが人間というもの。これだから三次元は困る（この言葉の裏に隠した意味は、僕の口からはとても言えません）。あ、そう言えば僕達は二次元だった！

「あら〜、面白そうな事やってますね〜」

「ほらー、またこういうふうの人が　　って何故に貴女がここに居るのですか！？」

「京。どうしたの？」

そう、再びやってきた野次馬さんは日向京さん、その人だったのです。って、あなたは確か、嫉妬駅近くの次元店に行ったのではないのですか！？

まさか、僕達の後をこっそりつけて来たとか！？実はストーカー予備軍！？やっぱり悪女だったのか！？

「それが〜、駅を出てしばらく歩いていたら〜」

「何時の間にか、ここに来ていた？」

「はい、何故でしょうね？」

……まあ、ね。道に迷ったってことね。確かに僕達がカップル特別企画をやっていた事もありますから、日向さんと別れてから一時間はあいています。それだけの時間があれば、一駅分の距離など余裕で到着できます。

しかし……ここまできくと、彼女ってまさか方向音痴？

ところで、日向さんの出現により、周りの野次馬が「あいつ、二人目の女か？」とか「修羅場や！修羅場！」、「一人くらい俺によこせ！こんにやるー！」、「落ち着け！お前は男の娘一筋だろ！」などなどをざわめいているのは、無視してもよろしいでしょう。

「京」

「何ですか、葵さん？」

「また、やったの？」

「え、前にも道に迷った事あるんですか？」

「たくさん」

「そんなにやってはいませんよ」

「これで少なくとも93回目」

「ほら、まだ二桁です」

「いや、多いですから！二桁って言っても10回と93回では天と地ほど離れていますから！そもそも十回でも多すぎです！方向音痴にも程があります！」

「晁、京は方向音痴じゃない」

「じゃあ、何なんですか！？」

「天然」

たいして変わらねー！むしろ悪化してるやないかーい！しかも断言されてるやないかーい！

「え、私は天然じゃありませんよ〜！」

「リモコンと筆箱を間違えて持ってきても？」

「それは、慌ててたからで〜」

「イヤホンと間違えて、パーカーの紐を両耳に入れていても？」

「あ、だから、音が流れなかったんですね〜。イヤホンが壊れたのかと〜」

「…友達のお見舞いに病院へ行った時、”何階ですか？”と聞かれて”面会です〜”って答えても？」

「だって〜、それしかないじゃないですか〜」

うん、天然！完璧天然！救いようがありません！素晴らしい天然！ここまで前例があるのなら、天然と見て間違いありません！ただし、一つだけ言っておきたい事があります！……葵だって若干天然です。

葵は、日向さんに対しての説明を諦め溜息を吐きます。そうです。いくら説明しても自分が天然であると分からない人間が、本物の天然なのです。

最近は何物天然が多いですからねー。可愛いつもりでやっても私ってやっぱり天然？”って言っている時点で、天然じゃないと世の男子は瞬時に気がつきます。その瞬間から、男の中ではその女はただのぶりっこ女になり下がること請け合い。

それから、もうひとつの見分け方としては、偽物は当たり障りのない間違いしかおかせないのに、本物は凄く迷惑な事をしでかすということですか。

そんなくだらない事を考えていると、いきなり公園に居た小学生くらいの子供が野次馬を掻き分け、僕の背中にタッチしてきました。何ぞ！？

「新川菌、この人に付けたからねー！」

あ、新川菌？何それ、美味しいの？

10・救いようがない天然（後書き）

何故か、次少しシリアス入る予定になりました。何故こうなった。

11 天皇陛下バンザイ(前書き)

なんか全然時間が取れない

## 11・天皇陛下バンザイ

新川菌……それはこの世を恐怖に陥れる唯一無二の最近なのです。大ウソ。いや、知らないですけど。

少なくとも僕は聞いた事がありませんね。何それ美味しいの？です。まあ、菌を食べる人なんていませんが。

それにしても、何なんでしょうね、新川菌って？僕が知らないだけで、皆さんが常識のように知っている菌かもしれないませんが。だって僕、常識ありませんし。自覚ぐらいありますよ。

僕が思考を巡らす間に、僕に触って来た小学生の男の子の連れと思われる同い年くらいの男の子がやってきました。

「あ、新川菌、この人に付けたから！」

だからそれ、なんですか？まさか、本当に致死率100%オーバーで接触感染する超強力な細菌じゃありませんよね？うわー死ぬ。せめてベッドの下のブツを廃棄してから死にたいよー！

こんなことになるなら、是が非でも奏かニツシーを連れてくるべきでした！あいつらに移してやる！女の子にうつそうと考えない僕優しい。

「何言ってるんだよー！他人に付く訳ないだろー！」

「えー！」

「そういうもんだろー！」

どういうものなのですか！今時のウイルスって特定の人にしか付かないようなものもあるのですか？そんなのいつできたのですか？何時何分何秒？地球が何回回った時？

………待ってください。なんか、僕も子供の時こんな事やって

いた気が（今も中学生ですが）……。

昔々の事です。あれは僕の女顔がまだ子供っぽいと許されていた小学二年生の時の事でした。

恐らく中学生以上の方なら分かると思いますが、小学生の男子と言うのは下品な言葉が大好きな奴がまざっており、一日に一回は人間の排せつ物の名前を恥ずかしげもなく声を大にして言います。全く僕ときたら。

それ以外にも他人の嫌がる事を平気でやる奴もいます。そしてそれをネタにして笑うという最低な行動をします。全く恥ずかしい！あれ…、僕まだ治ってない…。

ま、まあ、その時の僕達も例外ではないという訳です。故にその時に、こんな遊びをしていたのです。

「触るなよ、西田。菌がつくだろ」

「どついう菌がだよ！」

「西田菌だよ！」

「どついう菌だよ！」

「へい、晃、タッチ！」

「うわ！僕につけないでください、武藤君」

「とかいいつつ、俺になすりつけてんじゃねーよ！」

「奏。人は自分の利益の為に生きているのですよ」

「くそ、この柱に付けといたからな！」

「駄目だ、柱にはつかない！」

「何で!？」

「そついうものだから！」

「というか、俺汚くないから！菌ないから！」

「存在自体が菌ですよね！あなた」

「め、眼鏡が冷たい……」

「やめて、よして、さわらないで、カビがつくでしょ！」

「あなたなんて大嫌い、顔も見たくない」

「こうなりや、やけだ！なすりつけてくれる！」

「うわー、やめれ！」

ちよつとした遊びですね。昔流行ったのですよ。こういうの。 ” えっち、すけっち、わんたち、あなたの以下略 ” とかも意味よく 知らずに使っていました。

これは人に触るとその人の名前の菌がつくつていう奴で、それを使つて、鬼ごっこみたいなきことをしました。懐かしい。それと何故か良く分かりませんが、柱とかそういう近くにある物体にはなすりつけられないルールがありました。そのくせ、人の持っている鞆には付着するんですよ。

たまに、わざと自分の手に菌をつけて人になすりつける奴とかもいました。やっている間は結構盛り上がるのですが、終わった後に何とも言えない虚しさが残りましたよ。

ところで武藤君と西田君とは最近あつていませんね。……何故だろう、西田君にはあつた気がする。しかも結構最近……。

つまり、この男の子達もそういう輩なのでしょう。将来が思いやられるガキですね。まあ、人の事は言えませんが。

またも野次馬を通り抜け、鬼ごっこに近い遊びを続ける子供の背中を僕達は見送りました。そして気付きます。

ということはここにその菌の持ち主がいるわけですよ。この遊び、やった事がある人は分かるかもしれませんが、菌呼ばわりされている人は自分もノラない限り気分が良くないのですよ。だから結構傷つく人もいます。

まあ、でも、こんな奴らと関わるのだからその子供も、きっと馬鹿なんでしょう。多分”ミキミキポンチカスマリア、イエスカノーか半分か？”みたいなことを言っているレベルなのでしょう。ちなみにこれは、区切って反対に読むと意味が良く分かります。そして貴方は言うでしょう。

「何が面白いのか、分からない」

おう、葵。心を読まないでください。もしや、あなたはエスパー？ならばバリアをはるためにエスパー雇わないと！そしてそのエスパーに心を読まれないためにまたエスパー雇って以下略。

「菌扱いして、傷つく人もいるのに」

あ、そっちね。でも、男の子なんてそんなものですよ。下ネタ連発して、人が傷つく事を平気でやったりしますからね。まあ、最近では大人になってもそんな事をしている人間がいますね。例えば作し、うわ、何をする、やめ！

「でも、まあ、いつかは悪い事だと気付いて自分からやらなくなりますよ。ほつといても大丈夫でしょう」

「でも、あそこで泣いてる子がいますよ」

エッ！マジ！

「オオマジです」

「…え〜っと、それは何に対して言いましたか？」

「貴方の心の声に対して」

「貴女は本物のエスパーですか！」

「い〜え、驚いたような顔をしていましたから」

僕ってそんなに分かりやすいのでしょうか？こう見えても僕ポーカーフェイスなんですよ？

「自称する人ほど、わかりやすい」

「葵、何で、そんな細かいところまでよめるのですか？」

「こうみえても僕ポーカーフェイスって顔してたから」

「どんな顔ですか！？」

つと、そんな事はどうでも良かったのです！その泣いている男子（そうだと願いたい。男だったらまだなんとかなりますが、女子だったらどう慰めればいいのか分からない）は？

僕は先程日向さんのみていた方向を向きます。すると、野次馬の間から一人の女の子が泣いているのが垣間見えました！アーツ！あの餓鬼<sup>ガキ</sup>どもに違いがない！

僕の怒りマックス！久しぶりに人に対して殺意が湧きましたよ！大人げない？いえいえ、これを読んでくれる人なら、きっと女の子がいじめられていたら激しい憤りを感じる筈です。僕はそれがちよつといきすぎているだけなのです。何故かって？それは僕が幼女好以下略。

辺りを見渡すと、先程のガキ達を外野の合間から発見。僕はその方向に一直線に走ります。すると、肩を掴まれました。外野の一人で、先程のちよい悪です。

「何ですか？」

「何でもこうでもねーよ！何逃げようとしているんだよ！とつとと名前叫べよ！」

「そつだぞ！さつさとやれよ！」

……人が泣いているのが見えないのですか！

…駄目です、ここで怒鳴ったり、わめいてもただの八つ当たりです。僕はそこまで落ちぶれてはいません。

「すみませんが、今はそれどころじゃありません」

「はあ？そんなの関係あるかよ！こちとら休日返上で

」

ああ、言えばこういう！本当にむかつきますよ！ええ！こうなったら最終手段です。僕は周りの人に見られないように両手を重ねます。

ぶう

「え？」

「誰か屁をこきましたね？誰ですか？あなたですか？」

「ち、違う！お、お前だろ！」

「何言ってるんだ、俺のおならはジャスミンの香りなんだからなくてめえだろ！」

野次馬は誰がこいたかでもめ始めました。計算通り。掌にためた空気の出ていく音って本当におならの音に聞こえますよね？これが出来るように一年以上練習した子供の頃が懐かしいです。

僕はその間をうまくかきわけ、前に進みます。途中でひじ打ちが鳩尾に入りましたが、今はむかついている暇はありません。

ところで、途中で僕の腕にはんにゃの面がぶら下がったのですが、先程の野次馬の連中の誰かの所有物でしょう。丁度いいですね、ちよっとこいつで懲らしめてやりましょう。

運の良い事に、まだそのガキは僕の視界の範囲内にいたおかげで、一直線にそいつらのもとに迎えました。

どうやらまだ、菌遊びに夢中の様です。皆を追いかけていた今菌がついているであろう、帽子を被った男の子が息を整える為に立ち

止ったところに話しかけました。

「ねえ、君」

「え、何？ ひい！」

その男の子は驚き、腰を抜かして尻餅をつきました。まあ、いきなり般若の面が見えたらビビりますよね。僕ならちびります。

涙を浮かべ見上げてくる気の弱そうな男の子を見ると、罪悪感が立ち込めてきますね……。しかし！こいつらが許しがたき事をした事に変わりはないのです！僕は般若の仮面を借りてこいつらを制裁するのです！

「へ、変態だ〜！」

あれ……？何この反応？

僕が呆けていると、ガキの仲間が集まってきました。そして僕を見ると、同じように腰を抜かして涙を浮かべながらこちらを指差します。

そして口々に

「変態だ〜！」

と叫ぶのです。いや、何故に！？

「へ、変態とはなんですか！？」

「公園で般若の仮面かぶっているなんて変人以外に居るわきゃね

ー！」

あ、ばれてた。それになんか納得。でも、だ、だからって……。やばい、僕の黒歴史がまた一つ増えました。

失意のうちに立ち尽くし、少したつてから我にかえると、既に目の前の男の子は姿を消していました。やべ、逃がした！

般若の面を地面に乱暴に投げ付け振り向くと、未だに混雑している野次馬達を視界に捕らえました。その人達に対して呆れの感情を抱きながら、先程泣いていた女の子を捜しました。

記憶を頼りに少しばかり辺りを見渡すと、すぐにその姿を認識できました。そしてその横には葵と日向さんが寄り添っておられます。僕はゆっくりと歩み寄ります。

葵は少女の正面に屈みこみ、その子の両肩に自分の両手を置いて、何か語りかけているようです。日向さんは葵の後ろから、これまた何事か話しかけています。

僕がある程度近づくと、葵が僕に気がつき、日向さんに一言二言伝えた後、こちらに向かつてきました。ところで葵はクールフェイスであるからして、表情が読みにくいのです。現に今も、どういう感情なのか読めない。

「お母さんとはぐれたみたい」

日本語と言うのは主語を無くしても会話が成立する言語です。勿論、この文の意味も主語がなくても分かりますよね？でも、一応補完しておくのが親切設計と言うもの。僕優しい！このギャグ何度目？

つまりは、あの女の子ははぐれて、お母さんが見つからない不安で泣……ってちょっと待て！この解釈であつてますよね！？でもそれなら、あのガキ達関係ないって事ですか！？そりゃ、ねーべ！

と言う事は、僕が変人扱いされたのは全くの無駄無駄無駄！つてことですか！？恥ずツ！ちょっと死んでくる！天皇陛下バンザイ！

## 11・天皇陛下バンザイ（後書き）

短いうえ、多分かなり長い事次の更新までかかると思います。

## 12・母親は子を嫌わない(前書き)

携帯で書いたのと久しぶりだったのとで、多少書き方が変わってる  
かもしれない

## 12・母親は子を嫌わない

僕はあまりの恥ずかしさ故に、ジャングルジムに登り、その頂上から地面に向けて飛び降り自殺。

皆は目に涙をためて笑い、万歳三唱し、「地球温暖化はこれで終わりだ」と言いだし、僕の死は歴史に残る名誉の死となりました。ああ、僕はいらなかったのね。

「晁、遠い目してどうしたの？」

「あ、いえ、なんでもありません」

しまった！語尾噛みました。しえんってなんですか！

自殺した後の最悪の展開を妄想し、現実逃避していた僕を見て不思議に思った葵が話しかけてきました。

ところで、僕はある程度礼儀作法があるものと自負しています、いや本当に。

なのに何故僕は語尾を噛んでしまったのか。その理由はCMの後！

クラ、新アルバム、ビリオンヒット達成。みんな、話題に乗り遅れるな！

安い、死ぬほど安い。あのダブル味噌スーパーガーが今ならたったの2万ペソ。このチャンスを見逃すな！

本当にやるとは………作者は馬鹿か。まあ今更か。  
では答え、それはつまり、彼女が僕の顔をじっと見ているからです。  
しかも超至近距離で。少しでも体が動けば、僕の唇が彼女の額に触  
れるぐらいに近いです！純情少年（だと自分で思ってる）僕は、他  
の人から見れば目に見えて狼狽していることでしょう。

「大丈夫………？」

「だ、大丈夫。大丈夫でしゅから！」

これ以上近づかないで、お願い！理性が死んでしまいますから！い  
や、もう半死半生な状態なんだけど！

僕は彼女から少し後ずさりながら、何度も「大丈夫！」と発しまし  
た。まあ、そんな人間が大丈夫なわけではないのですがね。ノープロ  
ブレムなら怪しまれずにすんだのに、僕ときたら（大して変わりま  
せん）。

まあ、説得（？）のかいあってか、彼女はそれ以上言及してきませ  
んでした。やっぱり、あなたは優しいですね。もう僕と結婚するし  
かありません！

「わがまま、過ぎ……だ、よね………」

ガーン！酷いや、酷いや！確かに僕と秋月さんは釣り合いませんよ  
！まず顔からして釣り合わない、性格も釣り合わない………だからっ  
て何もそこまで言わなくても！

ええ、彼女に釣り合うのは奏のような奴でしょうね！僕より成績優  
秀ですし、運動神経抜群ですし、顔だって………僕だって！  
…無理ですね、トホホ。

「いえいえ、そんなことはありませんよ、楓ちゃん」

日向さん、あなたって人は、どこまで優しいんですか！？もう僕と結婚するしか、って……えっ？楓ちゃん、って誰でしょうか？

僕は、なにやら先程から僕の様子を見て困惑の視線を送ってくる葵を気にしないようにしつつ、日向さんのいる方を向きました。

すると、先程まで目を真つ赤にして泣いていた女の子が泣きやんでいて、日向さんとお話をしているようです。って待つてください。

ということは先程までの言葉は、僕に対してじゃなかったのですか！？うわ、恥ずかしい、死んでくる、天皇家下バン、……何度も同じネタやる僕って…。

つまらない事はさておき、僕と葵は日向さんとその女の子のもとへ歩み寄ります。そして女の子の前にしゃがみ込むと、警戒しているのか、日向さん（こちらにもまたしゃがんでいます）の背中に隠れてこちらの動向を伺ってきています。

肩に掛かるか、かからないかくらいの黒髪で、かなり背が低く、また大きくなりくりっとした目をしている非常に可愛い女の子です。

僕はその女の子に微笑み（僕の笑顔は今まで多くの人々を陥落させてきました、全員男子ですが…）、警戒心をほぐしてもらおうと画策します。

「僕は河合晃といいます、あなたのお名前は何でしょうか？」

どうですか、この紳士的な対応。これなら下心があるなんて誰も思いませんよ。

「口、ロリコンさんですか？」

何故！？今の僕の対応の中に、それを思わせる節なんてありませんか！？

「いいえ、ケフィ……違いますよ」

「でもお母さんが、見知らぬ人に声をかけられたら、ロリコンだと思いなさいって」

この子のお母様ア！あながち間違いとは言えませんが、妙な躰をしないでください！

「ロリコンではありませんよ、仮にロリコンだとしても、ロリコンという名の紳士なのです」

「ところで、ロリコンって何ですか？」

知らんのかい！お母様ア、肝心なところが抜けてます！

「ロリコンは、ロリータ・コンプレックスと言って、語源はナボコフの小説“ロリータ”の主人公が8歳から12歳の女の子にしか興味を持たなかったことからきてる。つまり、小さい女の子に恋愛感情をもってしまう人のこと」

「それなら良かったです、私まだ7歳ですから」

「葵、なんでそんなに詳しいのですか！？というか、7歳であろうとロリコンには関係ありませんから！」

「じゃあ、河合さんは、楓ちゃんに恋愛感情をもってるんですか？」

「いや、それとこれとは関係ありませんから！」

「……………！」  
「って驚かないでください、それから真に受けしないでください、葵！」

「あ、あの不束者ですが、よろしくお願ひします！」

「って、なんであなたまで真に受けてるんですか！それに、なんで

そんな難しい言葉知ってるんですか！」

「え、えっと、お母さんが教えてくれた」

「あなたのお母様って一体……」

「少し変わってるから、私のお母さん。って、え？あの、何で私を抱き上げてるんですか、お姉さん？」

「晃が犯罪者になるのはなんとしても防ぐ」

「いや、なにが！？ってその子を連れてどこに行くのですか！？待ってくださいーい！」

「待たない」

「あらあら、楽しそうですね」

数分後、追いついた僕は彼女の誤解をなんとか解きました。まあ、その説得の言葉はあまりに情けないのでカットします。

「晃は、巨乳が好き、巨乳が……」

葵！何、説得の言葉呟いてくれちゃってるんですか！

そう、説得の言葉とはズバリ「僕は巨乳好きなんですから、ロリコンではありません！」です。そういうと彼女は、納得したのか、女の子を話し、自分の胸を見て、少し嬉しそうな顔をしました、何故？そうして、今現在、僕達がいるのは公園のブランコ。4つある隣合ったブランコに、それぞれ一人ずつ座っています。ちなみに奥から順に、葵、僕、楓ちゃん、日向さん。ちなみに自己紹介は先程すませました。楓はもちろん先程の女の子の名前です。というか、さっきから葵が自分の胸をしきりに見て、その度先程の台詞を呟くのですが、なんてかしてください。

「あ、楽しかった！」

「僕は心底疲れましたが…」

「ごめんね、ロリコンのお兄さん」

「その呼び方やめてください…」

笑顔キラキラの女の子は可愛いですが、そんな言葉を吐いたせいで台無しです。

自己紹介の後、彼女は僕のことをそう呼ぶようになりました。まじで、やめてください。もし、知り合いに見られたら恥ずかしくすぎて、ニッシーを地獄送りにしてしまいますから。

僕は諦めのため息をつき、話題を変えました。

「早くお母様を探さないといけませんね」

「あ、うん…」

「元気出してください。大丈夫ですよ、私達も探しますから」

そう、今彼女はお母様とはぐれているのです。だから早いうちに探しださないと、彼女のお母様は大変心配なさるでしょう。そして、僕と葵のデート時間も減る。良いことなし！

しかし、僕達が探してあげると言っているのに楓ちゃんはどこか浮かない顔をしています。

というのも、これは先程自己紹介の際に日向さんに教えてもらったのですが、親子喧嘩をしたらしいのです。

なんでも、彼女の一家は夏休みの旅行先に、毎年海に行つてたそうなのですが、今年はお爺さんが夏に来て、一緒に山に行くことになったそう。しかも、そちらに、お金を使うから、海にはいけないと言うことを、買い物中にポロツとお母様が口を滑らしたそう。

そして、海に行きたい彼女は駄々をこねたそうですが、それでも海にいけない、と言われたそう。

最後は「お母さんなんて大嫌い！」と行つてお母様から逃げ、そして走り回って気がついたら知らない公園にいた、ということ。

「私、お母さんにひどいこと言っちゃった」

彼女は、今にも泣き出しそうな、歪んだ表情でそう言いました。そして、俯き、嗚咽をもらしながら続けました。

「私、本当は、お母さんのこと、大好きなのに………なんであんなこと言っちゃったんだろう……？お母さん、怒ってるだろうな……。嫌われちゃったかも……」「いや、そんなことはありませんよ」

「えっ……？」

「仮に怒ってたとしても、それはあなたが好きだから、あなたを愛しているから、だから怒ってるんです。それに、母親というのは、どんなに憎らしくても、どんなに自分勝手な子でも、嫌いになるなんてできないんです。今も必死に探してると思いますよ。大好きなあなたの事を」

「本当……？」

「ええ、命をかけてもいいです。でも、いいですか？それでも、ちゃんと謝るんですよ、お母様に」

僕がそう言つと、楓ちゃんは指で目をこすつた後、満面の笑みでこう言いました。

「ありがとう、ロリコンのお兄さん！」

ロリコン余計だって！せつかく決まっていたのに台無しだよ！

「河合さん、格好いいですよ」

「ふっ、それほどでも……」

「楓……！」

格好つけようとしたら、また遮られました。今日ってまさか厄日？  
そう思いながら、声のする方を向くと、何やら美少女がこちらに走  
ってきているではありませんか！なに、あの黒髪ボブの背の低めの  
超絶美少女！

「お、お母さん！」

うえ〜！楓ちゃんのお母さんだったのですか！？見た目どうみても、  
せいぜい高校生ですよ！どんだけ若いんですか！

僕があまりの事態に呆けていると、日向さんが楓ちゃんに言いまし  
た。

「お母さんなんですか〜。良かったです〜。楓ちゃん、早く行って  
あげてください〜」

「う、うん」

楓ちゃんは、ブランコから降りるとお母様の元へ走っていきました。  
そして、感動の再会。

二人はひしとお互いに抱きしめあいました。イイハナシダナー。僕  
も思わず、涙が

「河合さん、はい、ハンカチ〜」

「あ、ありがとうございます！ってこれ僕の！なんであなたが持つ  
てるんですか!?!」

「あら〜、よく見たら私のじゃありませんね〜。なんででしょうか  
〜?」

天然恐るべし。というか、ハンカチが自分のじゃないことくらい気  
づいてくださいー！

「ま、まあ、何はともあれ、一件落着いですね、葵」  
「晃は巨乳好き、晃は……」

まだ言ってたのですか!?

12・母親は子を嫌わない(後書き)

携帯でうつのは時間がかかるなあ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2428k/>

---

バカップル探偵 ～真面目とクーデレと一次元萌えと～ バカップルに昇華す

2010年10月12日00時00分発行